續哥合部類

七

須賀廼舎之章

續歌合部類巻之二十八

仙洞歌合　宝徳二年十一月

題

河落葉　暁千鳥　遠嶺雪

恐逢恋　松歴年

作者

宰相典侍 禁裏　二條 仙洞

式部卿親王　按察使公保

右近衛大將資量　権大納言宗継

吉野弘隆藏書

大宰権帥實雅
沙弥浄空
権中納言資任
権中納言公綱
右衛門督雅親
前甲斐守明義朝臣
散位伊忠朝臣
左近少将為富朝臣
右近衛中将経秀朝臣
左近少将季春朝臣

沙弥祐雅
左衛門督持季
権中納言教季
侍従持為
参議政賢
左兵衛督有俊朝臣
権右中弁親長朝臣
左兵衛佐永親朝臣
右近少将房郷朝臣
右近少将[illegible]朝臣

左近少将公澄朝臣
民部権大輔行秀

判者
関白

法印尭孝
蔵人式部丞源政仲
飛鳥井中納言入道

一番　河落葉

左勝　　宰相典侍

ちらすなよ浪もえこそしらぬもみちはのなかれもすゝ河の山川

右　　沙弥祐雅

浪乃音もしらつまぬ紅葉すくるよし野川の水柱のかた

笑止　左右両首ともにかしこく侍るを無眼にて
えらひ侍りかたきを右の下乃句北御の字
おかしく侍りけることはかるまじき難に侍
将又歌合乃例としてもこの事をさそれ吟覚
まさに侍れは左勝とや申し侍へりしん

飛鳥井中納言入道
左歌ちらぬ花の波を見るにもいとゝいはまほしく
をし詞のつゝき給へる心付おかしくて首尾相應せり
右のうたの大井川の浪此言にかなひても有にか
とくや侍らん左を以為勝

二番　　　　　　　　二條

左持　雅
江島ある人の御となりし大井の下も千代の流絶えせぬ

右
此たひは君の御世にて山河のいはほの波のかはらすやゆく
雅永
澤門のかす多ゆく郷とさへいはゝけふ堀川

かのみちは世にしきたえにしかのこゝろのまゝに大井河の
流のことく侍るしに侍るはよく見るにもおなしやうにや
うけむかしこゝにあまたの心をたのもしくか
間ゆる侍るとも此所にて時節をいはふ言の葉の此歌
ふかくしてはしめにこそはたゝふる勝にまさ
しくきこえ侍るは難なくもきこえやすらかに侍るにや
飛鳥井中納言入道
左かのよみならはしまてもかはらぬ御めくみを
大井川くまなき流の中にもきこえけん
聞あけきこえ侍りて右も末の世の時節をいはひて
いはほの水は此世のかきりなく侍るはいかにも

へて可為勝

三番

左　　　式部卿親王

瀧の音をきゝてこそしれ山河に海へとおちぬ水やなからん

右 勝　　右近衛大将實量

山分の末はふせきつる河なれも海の浪のおと

判云 左は船堀の音とあるも水は海にいるとし といふ瀧
あらため心 右はつゐの海せきいつる河なれとも かくこそ瀧
流せしといふ句にとおもひとめしに三代集にも
とさいなれはあなたにもなしらなるなに深き

待たれ見たきの音にあまりて

秋の夜とこゆり浪の音かねにつゝて

こゝろよりとも上へきます

四番

左 勝　　権大納言宗継

吹風に山のもみちのちりかふは落葉にうかふ庭の水

右　　太宰権帥實雅

落葉に浪に散りしくもみちのまさか嵐の山おろし

判云 左は乃行上句はさして見る也 尋ねて優ことそみ
ちよもいひかし優に侍るや 右はもとなる難

はみえわたらねと見さくまふあらしの山さくらや
時敏なとしのをしわたらんたつねよわたるへし
七十三番 右 中御門大納言
左のりみちなとも谷河太の波に数しら
江草そりにうつくみえわたるハつきをとふ
かしあをしと口きゝ酒くやわたらん

五番

左 持　沙弥浄空

三りとの河瀬にさしも泉やてしとやぬあをの
ころかあ

右 勝　左衛門督持季

唐錦秋の水の鏡にかけぬる葉にうつるもの山は

関白
左あきの水かあらに泉をとしうへ東風わたるまへ
さふかみしくきこえわたるを順徳院の御製
よきひの月の夜わたしやすに見えわたる萬葉
かきもよりや入待らん越のかはるもや太宰かの
花のきをの面影の思ひ出きわた優にハ
わたりてとかくきこえわたりて泉かさらすよ
わたるとこしく
てハかこいてとか月経りやよわたるや
七十三番 右 門大納言
左のりみちのよとあきのそかに舟に海へかゝる
みてかたしわたりきて太のそわたりけるかて

なほ行て踏へきしや

六番

左 持

権中納言資任

散かゝる山の木葉や大井河井せきの水と打なやむらん

右

権中納言教季

山の端やまたしくれぬを紅葉川流るゝ色のあさき木の葉

兵部 右方申云やせ川のもみち風にさそはるゝ

紅葉はしくれてこそ色もまさるとあれは

と仰られていやまさる紅葉の別の色

らるゝとてあらそひても吉野の花のさかりとは

やまひこゑのさきはたれ行河の是非の判

兵部卿中納言の左 右は紅葉も水の流るゝにまかする心を

左は山の紅葉のちりしをぬれたる紅葉の様を

あらはしとかりて其心をとりて小河の持

おなしく持にや

七番

左 持

権中納言公綱

ちりつもる錦の水をよるかはのせさる紅葉のしからみの末

右 勝

侍従雅為

散まかふ色のみちかきをせきかへし行河の流の

宗白
左哥水海に秋の山へをよせていなさるかし
めづらしきさまをよみたまへるもをかしき
またちらされ侍る白河かしくは定家卿の
とのみはかしきのと侍るの字なといふまてを
まかせぬさ海に侍るや右哥は當に海なる
と侍るにこのむかし手管のみちのやうもふ
詞ともにこそ侍ねなれなかなかとさるとて
かえなきつるにゝ侍るへいつれ後二首の難
仍同に侍り持にて侍るめ
左哥をもに定めはさ海に侍りも當に海さ

水乃むかしまてはいまこし海のうさやや

八番

左　勝　大納言雅親
大井川水ひきこぼし舞えて荒まつかぜのたてにやさしけ

右　参議政賢
立田川ひかりみち紅葉のとまりてこそ山風も吹
右哥はみなとくをのこしとまりし柴末の紅を賞
そまれ侍る心かかりつゝけたる定家卿のかきて
おもしろきぬを以海のくる事おしくやさしくたりする
しなた乃哥中二の句さへて定家卿を心

染ゆくは紅葉のりや
たえまなき波は鵜のせてまつる江に紅葉の色
さえかくて茂る山の紅葉に秋の色をうき
てなかるゝも紅葉ついつまても残る紅の
ちりしくもみちといふて紅の袂のいろまさる
をしむとはいふとも年ははらふて秋もあるへき
かるとをあらん霜のふかくてつま紅の
こゝろあるものもしかくて紅葉ちるいつまても
たしきしるかなにつまくれ錦へよるや

九番

た

前中納言明衡朝臣

山河に波よかゝる落葉をのせてめくる紅葉の錦
太将
又秋山風吹はいつとなく紅葉ちるみなもとに
関白
紅葉分くる秋の錦とふかき色
こゝろのみとめてあはれなる
たつたひめ紅葉の錦をおりそめて
よあらしや
宰相中納言
太山も紅葉をちらす泉河
かるなるよ紅葉のいつくをしくもありけれ

よかさりわしろと乃と行りハあしくとさまえ
めた一刀葉の行ハ猶もと捐りえんとあて
といふ所しも三段康支行もハ太の蕃（きよ
また

十番

左持　　従位伊忠朝臣

からりさへ荒の東と山風にさそふ水あらしとおもひけるある

右　　権大中弁親長朝臣

散るをともさそふまの松川にかゝもてかきよ

左　かさりさへあらしとついて下にさそふ流あ
りきちし
てと行の国公の雁まてハ行はと云しまえ

ふてや太字をさそふ手をかりてて
花ふうしとめてもるのいなるくハ行らんや
雲井中御ゑ左
左右とをまるしくハ行るさ大の東の白波
まさしくめくまさえ行のみや

十一番

左勝　　左近中将為富

大井川山ハあらりまさかこしのさきふ行を流よまか
を

右　　左兵衛佐親朝臣

ちりちさしかちの葉も今も山河の水ときさそふ風
みよ
山ハあらしまよふしのさきふかし行もハ海ふ

かくれなしいまさら何事と何をかはいはし
かうしぬとやのことくはらん右歌さを
いとありて又かはらんとゆかいに筆あれまよ
ひとすりの行らんたゝかぬ様いはつまとか
なくや
飛鳥井中納言入道
右水をこゆるふちにゆや路をもえてこゝ行らん
たまうらしとか

十二番

左 勝

浪のよるゆふくれをみる龍田川水もちかのみなのあたらて

右近衛中将経秀朝臣

右 持

右近衛中将房郷朝臣

山河よりふかくや水の深浅のかはりをふかみて

宮内

左右ともにかはりて浅深をわかれてゆくれは行題

まことにて行の納つてまかせしるへし

ならのうちにとは行のにいてまかや

飛鳥井中納言入道

なかにのちかいつまとにまさりて行るゝ

十三番

左 勝

左近衛中将季春朝臣

うつりきて浪をぬれつゝ錦秋のくまの大井川に

右 負

左近衛中将實名朝臣

ちりかゝる紅葉のいろもかはりてや波のあやなき深川の水

判詞
左哥は波さへたえぬは秋のことにたえぬさまなり
一首の心は紅葉の時はいとゝ猶紅葉のやうに
絶まなく絶ゆるもなくおちつる大井大井川
立田かはとさしときてかたみとある河も
たえりはきけんりもやしもや見えゆくかんや
ろくさしてよからん所も見え行ぬれども
右哥は御心ある
右波さへうつろひけりし秋のこゝろを紅葉なれ
むらみちの車のあとさへしられぬ月
とまりの白雲に夜康見えてもたちの月

十四番

左 勝　右近衛大将藤原朝臣

山風やさそふのしくれふくなへにもみちの錦浪そたつなり

右 持　法印堯孝

雨はやむうききりふかき峰の紅葉にもうつる水の白浪

左哥なかふるしのかけしのつまてひとしとてつら
またも亭子のむかしをおもひやりていとあはれ
くはしく見えはへるに雨のもよう事とも見えぬ心
の事をとも下行かへきや大井の道をも事を
つまてはいかにしかなりしも行はんとしとも見え

御の左歌は前のちかきみ浪もうつりけるを
みなちりぬるもとゝしかは波まして侍りしや
判者仰云入道
西川の流きよくうつりかはる事なれとなのき
以左まさるへくや

十五番
左 勝　民部権大輔行秀
紅葉のちりはさそふ嵐よりいぬるまとの山川なかれて
右　前式部丞源政仲
橋姫の秋のよるの袖はけて紅葉に吹入る山風
同じ
左さるふかなしにいはれまや侍るは優に

判
右侍東河にも此袖のまもとみ紅葉数に侍れは
猶劣とや申へや侍らん
判者仰云入道
左右いつまてと云あつる両方にまさん定侍るへしいさ為持

十六番　暁千鳥
左 持　宰相典侍
むすそしかゝ河の衛の数も人にたえむし吹上の
右　式部卿親王
雲ゐのかきみえす河よる衛のたえて後の有明の月
関白
あか首の衛も浪衛の月に歌も判しけるは

沖洲の霧にたえたえこゑのみ寒暁乃氣色在

眼前是非迷優劣難弁

左持判云左

まさきての衛りかたへえてとつひ沖の白洲にきえ

ちとりみ左明さむし　左明の月ちかく侍えみ

うかひて海ちかく覚えて侍る勝劣かき

定かたく侍り

十七番

左持　　二条

さ夜衛花に立てて左明のかたふくさて流るゝ

右　　右近衛大将實量

鳴きはてなきゆく月や友衛にかたふく浦つたひ

関白

かたふくかたふくとさそひゆくかたやみくさよう

つたひしも左歌はよろしく侍りぬるにや

右歌もよろしく侍るに勝て侍らはは持と

さよちとり浦つたひゆく浪のよるかたふく月

を惜む心めてたく侍るに相似て侍るや

十八番

左勝　　按察使公保

難波かたうら風さむき夜を川の月も入江に鳴千鳥

右　　権中納言資任

さしぬさしまされ如と十夜此浦の蕭の月ぞ衛 よくらく

一炎白
此面首紙燭一寸の斉しや、作られ大納
言もいかかせめてや作らんみえおね
寛喜中納言大臣
大まゐの関の明のあはれ明衛かすみは
あはれをうつしやと云　定郁是れも作りや
左月を入江と波よやまらてあやふ山の
さま入ぬさまいふみえを峰の月を待ぬ
つらなしともよらんて作らみ蕭の暁よ
ゆらん事やいとと見作まゝ於左紀絹や
中へらん

十九番
左 勝　権大納言宗経
さよちどり浪をまつのをきこえて暁の
右　権中納言公綱
ゆきもそを夜やこぬそのうあ衛うむら接の大和の
閑白
此歌憲さまつこぬと此歳ハかり作まてとし
ぬてなくしもしやすの引きはまく作み徳
しく作りけりや
寛喜中納言の左
左ちの行いつまをまうてしく作る物なるとまや

二十番

大宰権帥實雅

左　勝

さよちとり妻まよふらし暁ハ浪ゝにうらの湊に鳴なり

右　沙弥祐雅

[illegible]とゝめし夕かたの澗[illegible]らん[illegible]の月[illegible]

[illegible]左歌長[illegible]の[illegible]妻[illegible]ふらし[illegible]

の[illegible]

乃[illegible]

[illegible]万葉乃[illegible]

勝

二十一番

左　持　侍従持為

老の波よりも猶[illegible]河瀬のうへ[illegible]

右　[illegible]雅親

有明の月をかゝえの浦[illegible]妻[illegible]別て[illegible]

判[illegible]老の波[illegible]月

[illegible]貧[illegible]

[illegible]

老の浪[illegible]

[illegible]月[illegible]

[illegible]

二十二番

左 持　　　沙弥浄空

あさ人のねさめよりさきの衣は鶏のなくなりにけり

右　　　法印尭孝

なかなかやねさめもやらて鶏の声をきゝてそあかつきはしる

判云 左万葉の古風をおもひよりて上句にとゝまりはやと

ち下り候なりや右思入てはおもしろくきこえ

はべりても聞きらしおもひ候へきや持にて

候へし

右兵部中納言入道

左はさきえもあはれは落句の上のきゝ

思入にのたつ心なからもてことは右はまされ

ともあてはなはとゝはとに優なるこえ候はゝ

あるまじくや候

二十三番

左 持　　　権僧正孝

なかなかに月を波のうへ風のおとくなる嵐の

うき雲もなかなかになきはしけるかたはらや

右　　　左兵衛督有俊卿

判云 左あはれにきこえ入のゆくゑをもしらすして

きゝしえおもひや

元三井中納言入道
あまたの夜暁の声ハいつまても白神ならや

二十四番

左 勝　　　　　　権中納言教季

鳴ちとりおきつの小夜や明ぬらんかもの河らに具ゆくなり

右　　　　　　右近衛中将経秀朝臣

有明の月に心をとめさせよひとり長夜や寝かねつらむのせきもり

左歌末句云々十七番の歌と同し様に侍りて
わくかたもいかにとおほえ侍る右ハ平頭聲韻
の二病侍りとかぬ事も侍るをこれハあまり
まさるへくや侍らん但左勝まての事ハおかつつかぬ
侍り

此番いつれもよろしく侍れと左ハ十七番の
歌に似て侍れは右ハ十八番の歌と同し
心なるによりて左の歌に似侍らねはまさりてや侍らん

二十五番

左 勝　　　　　　参議政賢

有明の影もこほれる山河の浪とともにて立渡る秋

右　　　　　　散位伊忠朝臣

浦風に立田のもみちも散ぬらん波の上にいつる月かけ

左右の歌河浦あまたに見えて侍れと
波にこほれる月かけハ猶左に侍るへし

こゝろへ加へ侍る事侍らぬにや覚え侍るを
たまへ判者のやうなる事をさへ注しつけ侍るも
いかにゝかゝることたて侍らむと恥かしう
や侍らん左歌浪とのみして侍るこそ侍らぬ
いかは波とのみぞいふへき事のやさしさも見え
侍り右のいつくの浪とも社にことなく覚え
侍るや磯にも沖ともいふ事なくともなれと
申さし侍れは波と離れてはかなき侍
ましきやうにも聞えて侍るにも
覚侍るまゝにや管見の愚案を注す僻事

侍るへし
[illegible]
左大月社にて侍るを浪のこしてといふもよし
く侍るは左の勝なるへし

二十六番

左勝
前甲斐守明[illegible]朝臣
月とこそ見しまよれあまのとあるにやあらんとちはやふる人

右
民部権大輔行秀
ちりはてし夜ゆかりのくもと波もなきゆふへそふる

左月とさへの字いまよきたくへき事の中
のもやの字もさしへてきこえ侍れは右のいつそ

山かつらこゑもこえの海しらぬ秋ならん行らん

右少弁中御門入道

右 なかくしもひいてあきをかのやまてゆくらん志賀

らハ花のなかめへきよもすき

二十七番

左 持

やりいふころのくもハ花さそふなるはいふてよ吹ふかせハ

左近衛中将為富朝臣

右

有明の月をかうらて塩あひもこふあかつきのそらあかり

右近衛中将實右朝臣

花ちりしひとつふたつ花のうへハをふもののつきにはあきなまや

さえ行太もふあかつき月もくまもなきや

行んなましへて秋とらしくや

左少弁中御門入道

左 やりひとふるのうへハゆかりになさこそに

うぬとそきこえまさゆかん太に出てくいゆかり

とありうみかなとハかなしきの峡上のみなと

ひとりかくせよハうきこそやきこゆらん

わすへてみ秋

二十八番

左 勝

権右中弁親長朝臣

友やかゝるもや別とさその花かすのさはなのゆくへの

右 負

左近衛中将季春朝臣

あり月乃霜にかよへる光なれば村雲もこゝ立衛かな

関白

霜をかさねのとひてまさこそまさこそいへる

みゆるうけて心えたるやと左のしらべにもかなへり

もありしを持とてつまぐりのことなしといへる

いうまこそみえてやはらんちぎられけれ

前大納言中御門入道

右 宗よりくはしく行かふと暁と云題に初の句よめる

つきのとゞまることしもなくゆえたゞいまを別

ときちの袖のかたらひこそもきかまほしくなりや

二十九番

左 勝

右兵衛佐永親朝臣

有明乃月はさしいる松乃緑にあさまへて吟閑なる

右 蔵人式部丞源政仲

さえゆくまゝに松原の中しての多鳴く声のしき

関白

左歌のことばえをも持て月はさゆるもしき

やうやきこえ侍る大方のさえゆくまゝに哀

のさゆる色しも霜にも風にもたへてはありをと

しかしなをや侍りけん

前大納言中御門入道

このまゝみゆるしかりその事なるや

三十番

左 勝

左近衛中将房卿朝臣

志か乃浦やさえよる波もこほりけり沙にすむ夜の月

右　勝　　　　左近衛少将公澄朝臣

玉川の月もてらしの風にうかふ川波のかけの涼しさ

判
両首ともによろしくきこえ侍るを左はことはにかよはく聞え中々に見え侍る

すゑのかりのえふかゝり半はさるにかゝり侍るへき

にやあらんさて右の歌の玉川の景色をたとへはおもしろく

聞えてをのかみてにあらしく侍るによりて侍るへき

つまあきの月影のはあまりよろしき歌にや侍らん

左右の歌ともに勝負なきにとかく申へき所なくは

まいて右歌の玉川の月のいさゝか湊の波にて侍る

三たひ氷にさゆる月にしも光をそへて侍るは小し

らまし侍るに右の勝とやよしといふへからん

三十一番

左　勝　　遠山雪　　　二條

やまかけの雲かゝりて麓の雪はたえてまた侍りけん

右　　　　　河添和雅

かけまくも代々の葛をかくる山や積る雪峯の白

右歌にも山の名をあらはしてたち侍ると並て鹿乃

なかく見えつるにやかたへは雪のけしきあかくて

御侍らんかし

右方申仰てのたまひ
左もまさりまさりて心の　かかりけるにこそと侍るめれ
しく侍めり右のたかさ山の花霞の雲かかるを
おかしく侍れは左為勝

三十二番

左 勝　宰相典侍

明ぬへし雲のはたての花の袖かかる峯の白雲

右　侍従拓房

尋きて見ゆる外のいろくもくもは雲に別しる花まよ　りけり

関白
右のよき雲に雲の花を七のまま見ゆくなる路

左の花さくらの染羽艶に侍るは勝へきよし侍れ

右方申仰てのたまひ
右奇ものあり花の天つ雲のたえめの
花さくら雨のきたゆらむかたかれむ気色をは
勝に侍へし

三十三番

左 勝　式部卿親王

染つかり雪と見ゆる河霧の月かかるよのみ河の峯の　さとかた

右 持　法印覚孝

峯たかき雲の光も月なりけるかかる雲かはは月かかる雲の　花

関白
これねのひさしくは花の方に見えて侍れは

いかさまかりけりさかしけれは雲かかるは帰の花

おなしく優に侍るハ右のたきつせにや

基俊中納言入道

左哥もよろしく侍るを花をも入道

なり雲ありとさゆりより刈のかたハ河北

まもるさり事とききこえ侍るハ古めかしくや

三十四番

左 持 按察使公保

かつらきやたかまの山のさくらハ雲ハよそなるみねの白雪

右 権大納言宗継

雲ハつゆきえてそ高間やまよそにたつ桜花を詠

両首の詞峯山雲中乃雲外の眺望

たとへなき御詞も侍らぬにや

基俊中納言入道

両首の心をまつの心此雪浅深雅侍らんや

三十五番

左 持 右近衛大将実量

そのまゝの山こそかくれて雲此跡すましてを花の跡の雪

右 左衛門督雅親

いく山かみぬ吉野の雲も越路の花に積りけん

基俊

左哥ハ雑の歌ともなく少くや侍り右哥の結句ハ

りくつりてもとハいへすさまやいはさてなき

つくよく侍るとハいかしく侍りなり

やすらかん
たえまなきを〇此歌意と云趣向の体は
猿をきかんと侍るハつゝましくもあはれとも侍れハ
右乃新雪み月祥也

三十六番

花　左勝

　　　　　　　　　　大宰権帥實雅

はなちるはあきかぜの山おろし猿はなく〇此歌はさきにあれとさだむべし

右

　　　　　　　　　権中納言資任

風さそふ花をかきくもらしゆく雲へつれ果し嵐の行えを
このあたりの山寒さもいまの人にしらぬいら

まことや雲のまよひわたりしうたのおもかげし歌意ハ
少あまのうへ山をたまといひて歌の心をとりしもの
なれハ人さまにことに笛見の歌いまだ読る足歌
ゆへつきて是非を判しかぬ右歌ハ傍題を任
し歌のよしあしの心かくれて変せさりけりや歌の文
右の歌もそれしからぬ字此判之の篇にて拝
さらにまたハ歌をうつして古歌ハたかく読花を
ふしんなる事や猿が云ふなり〔ことに〕〔illegible〕
ち歌のいハ花の花ふみて行しめ

三十七番

左 勝　　　　沙弥浄空

嶺こえて秋まつ月もさらしなの光にたかき雲の上かな

右　　左近衛中将為冨朝臣

よそめにはにほひくまなき月かけもへたつる雲のうへそくまなき

関白

左哥さらしなの光をそへしるしをやすく候 右哥つくたるをつきつゝくや候ん又かはらて持にて候へし

飛鳥井中納言入道

右初の五文字借かしもはし候を左哥はたゝふ雪のさしうかしとも心あらん候て勝にて候へし

三十八番

左 勝　　　　花山院持季

そのかみは雪のふへとさかねたかきてふ山の雪のさし方

右　　右近衛中将房卿朝臣

さも空の揺のをみあれぬ嶺は雲間の山のしらむ

関白

左哥後句さきやうに候ん右哥をみ雲井よのま此字よしあひてきこえ候ゝさや候

為豬

飛鳥井中納言入道

左右かなしかもの事のなし

三十九番

左 持　　権中納言教季

はるゝよもなをしき朝な〳〵雪ふるむらさきの春

右 勝　　右近衛中将臣

かきくらし花なつかしき夕くれにさそふ積る雪のあはれかな

判白

右首の御哥ありもかなしき哥のはてや

左歌もまたをしきにいて花はもとの色にてあ

まかくや右ハまさり侍らん

四十番

左 持　　権中納言公綱

きさらきハ月のてみさりし花もとあるゝ雪の暁

右 勝　　左兵衛督有俊朝臣

名にしおふ宮にもうつろふ花の雪をまた

右哥なく〳〵はなにしもとり侍りて

おもひかねかきつむもしかたへ

おもかけもさやに中山をへたてにけり

けふこたひ中首のこゝろをすこしまさりにけり

右哥の勝分もこゝに侍り

四十一番

左 勝　　参議政賢

花ならし見えて行やみよしのゝ里よりなほ白雲

右　　民部権大輔行実

吉野やま嵐の吹まゝに積れるは雲か花の
白雲の里よりさらにまた白雲のみね　　春

判
左

里ハ吉野乃山したちかくれいとおほ乃山の花ハ
ひかれて行ハさのミおもかけ行たるハたれ
雖とりまつれ右初句もさらにやと行
も難の色にいつまで一首の風躰とも覚え
侍らぬ右ハえんの姿ハ花よりも行そへし
勝

以判者の白雲同科なる

四十二番

左　勝　　前甲斐守明親朝臣

なにとなくやまの花ぬる白雲のいつかはかゝる雲

右　　権大納言長相朝臣

暁くもれハ雲のそらもあかれぬさ山雲の白く
右初句ハさそへて見る行かしやはてあかしき
　かな
まはりて心にあく相はすへし
判者同様也
いつもとおもいもとしハ海のいまい
さりつとやくや

四十三番

左　散位伊忠朝臣

葛城や雲のよそなる嶺よりも花の雪ちる山おろし

右　右近衛中将實文朝臣

さえてふる雲ハ跡なし春風のはらふの花や雪積るらん

関白　左歌のつゝき山乃雲めかれ侍り絶句ゆへいひて

かきてよろしや右歌三句をよしいふきしみえ侍れ

と又ゝ末の侍りや勝へきさまなれ

左雲井中納言入道　左雲のよそなる雪といつ侍りけしきを侍

絲と右ハさしらぬ雪の花ハ勝侍らん

四十四番

左　勝　左兵衛佐永親朝臣

今日いく日はるも山鳥のをのねをたえて満る花の白ゆき

右　左近衛中将季春朝臣

いく積雲井乃花乃白雪ハ積かさなりて今さへつゝて

関白　右歌雲井の三字乃比初時雨見かなひ侍りいて

左歌雪ゆるゝ山鳥のねそそ得ことを侍ら

あやかりつゝなく侍りいつ雨かと諸同右かま

さり侍らん

左雲井中納言入道

雲井の花と見月ハさえかさなるや花ハ春も

四十ともゆさかるや如し

四十五番

左勝　右近衛少将雅経朝臣

みよしのゝ嶺の白雲積るとはまださきやらぬ花と見えしや

右　兼式部少輔源政仲

雅なれし形見の花とつかはらん惜しむ嶺の霞

判云

左哥文字足らんと思ふ上句古き本歌の詞よくつゞきてみえ侍るを右哥またふる雪のはなみのうちにも花をあやまたんまではいと見え侍り又定家卿の哥にかさとの雲のかゝるまで侍らんやよ

花の手のりし侍るやうにみえてそしたる侍

もしは花の香とてそみえ侍るを

左右弁中納言のは

左右はつまるを雪とともにしくるに侍り

かうなりや

四十六番　忍逢恋

左勝　式部卿親王

かひなしやあふよはゆめとなきぬるを世にの幻とや　せん

右　大蔵卿雅親

知るらむ何ときまてばおぼろ月夜の深き哀は

左右ともに源氏物語の心をとりて艶にこそ

かげ見えし高き所にやどりける月の
影にそやなさけ娘なりける人に見えける右も
よろしく見えてたがひになさけありてきこえ
けるかや持とすへし

左方花井中納言入道

左ハ世にふりける人やほろびんといふ事をかなしむなか
ひ右ハかへさもの表をおもへとことしゆく
年をへていつまでも光源氏のなごりをともに
侍よし申見えけるハ持にてや

四十七番

左　持

二条

きのふまで新枕のむつごとも源のよにもあまたそやすな

右　権中納言資任

そのよりたる花ゆゑそゝろに東風にも匂ひふかき梅の　さかりの

関白

左ハ源のよにかけてもうけたまはりなく此歌

右ハそのひよりかをる梅の花の中にもめづらしきにあらざ

やうの姿ハかはしくさまことなる所の所ハまさりなるに

よや持らん

左方花井中納言入道

左ハ雲のうへとも右ハそのまゝにまよひぬれば

いつくしとミこえておもしく持なり

四十八番

左 勝

かくれてのうき名をもらす河よどの水のあはときえぬべく

宰相典侍

右

世をいとふ身にはなかく秋かぜのたちもさぬ中にあふ［illegible］は

沙弥浄空

関白

左哥かくれてのうき名をもらす河よどの水のあはときえ姫とかりあひゆるひてかりしくらき哥にえ右の哥も心をとおほえ侍り判者のまかせなりにゆるされん

左右ともにまさしくわきがたく左哥あはせの水のあはときえぬとやいへる心入てきこえ

侍るは勝とすへくや

四十九番

左 持

あふ事を涙のことにもらさねは名をたにしらぬ［illegible］

左兵衛督有俊朝臣

右 持

［illegible］枕のしたにうきぬ［illegible］

右近衛中将経秀朝臣

関白

両首所得夫相交勝負難分

宰相中将［illegible］

右［illegible］もしくもりは勝へきよしみなれ

五十番

左 持

右近衛中将実右朝臣

人よりもあさましいかにふかきよと我も涙の川なかるなり

右勝　民部権大輔行秀

涙川人めつゝむの袖をこそひとりあまたの波やかけつれ

関白
左首の涙河深きよしかゝれと川なきさなきにや人めつゝむの
袖をつゝむと思ひしに給ふるまさりて侍へし

右大の絵ことゝゆゑを侍り給ふとや

五十一番

左　参議政賢

人しれぬあふよのくれを待侍るやをしやかなしき

右勝　左兵衛佐永親朝臣

うちとけて流れし池水の鳴かぬ涙をさそふらは

関白
花はねぬ夢に侍るも難なく侍り右勝
すこしさそふ侍りや絶世二句つゝきん
なほといひてまかりてそかゝる侍りあらすそへてお

しらすて
花とあし　　参議中納言入道
ひとこそは侍りこそ右ものゝ風流勝

五十二番

あるか涙ながれはまさりなんへくや

左 勝　　散位伊忠朝臣

いつまでかあひみることもなかるらむ家をしるべにおもひ

右　　右近衛中将房通朝臣

おもひきやむすぶの神の中のゆかりのはてはみえけん

関白

左方後撰集にいはく年のはてになりにけり

こよひこそ侍ましけり月日をのみうらみつくし

侍らばあひみる事のゆかしきにもあらで

らんにてはいかにぞあらむとおもひてかきつかね

ふかきところあるに右人の歌もさもやと侍り

へきにや右歌ハいのちをむすぶハ万葉集に詞ありて定

家にたえくらをえ侍りしかとあたらしく家の歌

いみじくもむすびてはあれハあはれにあやしきぬるに

えて侍るここの歌にはにほひしたしくきこえ侍り

みえ侍

右歌の発句ハあまりむすびなかれてハいつもきこえ不會歟

かにかくなれるをしるしをも侍れ絲を勝べき

にこそ

五十三番

左 持　　權中納言教季

えをいとぬくしきを根をあさみあはれしらぬのあまりかな

右 勝　　左近衛中将季春朝臣

相坂の関の清水ハ浅くとも汲ひとあつと人はまたなむ

関白 右あふさかの関のこなたにすひとあつとあれと詠

いとよろしくきこゆ　仍為勝とすへし

前参議中納言定頼 左ハさふらハれときこゆる歌也と申の句

なとかいまそこし事こそぬまつる詠のや右

も難なくハ持とおもふや

五十四番

左 持　　権中納言公岡

ちふくる人のゆきぬるよはひかたいえてもなし　相坂の関

右　　権左中弁親長朝臣

身とさらぬなのかかハあふさとこそせしといふなるをしさ

頭弁 右きこえてもなかしあさ坂のせきこゆる難なくき

さいえ侍り 勝へきにや

前参議中納言定頼 あふてもなかしとおもひてむなしさと侍るらん

たいしなかまてとての科かあるしかりしや十へたらん

五十五番

左 勝　　右近衛少将公澄朝臣

あふまてはあかぬ月けんとまちかねし友まかちへてもすてにくれ

右　　蔵人式部丞源政仲

ふもひさく物ともミえすふかき事ともまつ中そを加へてこゝろを

関白
左あまつそらとなとハいひて侍るや侍らん

それの中に心字見て侍るをたゝよはかくてま

ほとなくみるハいつゝ優なりさりとは非を勝

らんかし

兵部卿中納言ハ左
左方如あまりさなかよ侍り

五十六番

左 勝　侍従物為

すゝあらぬ所乃ともしらの里まつ月人のそらハかすみへと

右　清原亮孝

うらにはやまのはもなくてなかめしに山の端のかけ

関白
源氏見ざる歌よみハ遺恨の事とて侍る成

ハなをいハ侍りしにも此あそひの両方の心

ともれかへとかうしくまかせて侍るにつきて

左いふかき舟の君也事うや侍らんにかふ見の

ほかなるをいさしらの名やそうあらしくや史え

侍らん右ハ又あらつかの中見乃事しや覚き

このしきみちさめぬ世をうらもたかしすみく

すそれかえ侍るいつきをむかしの事なるを

いひなされたる中々に殊勝にきこえ侍る

慈の心ゆきまて侍らねハ世かくれしく勝事にや
いかし侍らん
為家卿中納言のた
左大の哥こそも源氏物語の心をかりへ侍り
けして八雲の名所ハ女ゆくしく侍るとい
ひまして心ゆるやうに侍るかや勝へきまゝを

五十七番

左 勝　按察使公保

さるまとまハ空をやまさえんと斗こおもひ出て山のはの下にた

右　沙弥祐雅

きまてとくく悲葉の秋もちきつゝかよ

七

又白
左ハ上句かしく右ハ下の句宜しくきこゆ
侍るよし勝侍るにや
為家卿中納言入道
左の山をこゆるの中にも色なる心ましさ
ことなぬ横雲ハ侍るを右の下句優美ハ侍
ほへしの勝

五十八番

左 勝　太宰権帥実雅

うひくまく人の心の色へする秋の関ちりなし

右 持　左近衛中将為富朝臣

また底のつたく色をひくよハ紀の哭ちれ傍なめて

花を伊勢の浜によりみらんとてよ
勝を関白のはからんにまかせはへりけるに右は
左はまくはまちえ侍らぬ花のかをりはかくかく
ひかりしぬるや左のこゝのち山ふきはさも申
さはるゝなとしや勝をはりしもきこえけりて
はまちえ侍らぬと経信判に不廃せすや侍らん
あまりあさはゝにまさり侍ると花の香あかつ
かぜまよつきて勝とや申すへきや
権大納言中納言右
左大臣関白かなしけとのまへや

五十九番

左　　　右近衛大将實量
むさしのゝひらくる霞をかけしはかなし桜井はいつや
右　　　権大納言持季
いろかえぬはいまねぬるきは中につむかゝきか神の
うつり香
関白
左右判中納言
左右のことかなしけとのまへや可為持
左むすひをる霞をはかなしむすひを
さらにきこえ侍らねは右もいはさるゝとて
ちりぬる侍をと持つしかるぬ様あるへう
て持とまへ

六十番

左 持　　権大納言宗継

さよふけてゆきゝの人もあふ坂はこえてこそゆけ夢のかよひ路

右 持　　前甲斐守明親朝臣

あふ坂の関ハへたてぬ道なれと人のこゝろにゆるさゝりけれ

関白
よみ人のあふ坂の関をよそにみするかたち 右は
とこのみとゝのひたるやうにきこえ侍れは持にや

前左大臣中納言大臣
此哥のあふさかの関も勝劣不分明にや

六十一番　　松歴年

左　　沙弥祐雅

和哥の浦の松に千代へん老の波よそにそなれぬ松かえ

右 勝　　法印尭孝

七そちやちよといひしこゝろ白川の波よりたかき松のよはひハ

関白
左ハ若浦の松に千代ふるの詞をとりて右ハ白川の波に七そちのよはひとゝのへたる哥の体
ハ猶をくれるよみハみかへる述懐に侍りこれを
いひつゝくるを見侍りてまさる波よりたかき
なと侍るハ旅保のむかしたちきこえ侍る
とも侍るやらんもの申さむ侍るよしを見え

前左大臣中納言大臣
侍るハ右たかく猶の哥とつけ侍りぬ
右白河の波にむかしの松のよはひは

左哥ハなしあしまれともさりけるや侍らん

六十二番

左 持　　　　　式部卿親王

君か代の千とせを[illegible]ともたとへとも二つの[illegible]

右　　　　　権中納言公[illegible]

[illegible]代にもありもしらぬ[illegible]今いくよのまつの[illegible]

左右ともに二葉のまつといふ[illegible]持[illegible]

[illegible]とも[illegible]ともきこえ侍るや

[illegible]勝へきにや

左[illegible]君か代の千とせも[illegible]

[illegible]に侍る[illegible]

難[illegible]ことに侍るや

六十三番

左 勝　　　　　宰相典侍

君[illegible]松の[illegible]緑の[illegible]

右　　　　　太宰権帥實雅

[illegible]に枝さしそふる[illegible]

[illegible]枝さし[illegible]谷の雲[illegible]

[illegible]松の葉[illegible]

[illegible]花[illegible]勝

右方弁中納言入之

右 前いひちきりて七ハ千代こた松のしけ家
のかけ乃ちとせふるてふ緑かな
へ行くまへきちるねはむかしたる緑

六十四番

左 持

按察使公保

くもりなきこゝや北山の松か枝はいく世乃あらしふけん

右

右衛門督雅親

なきてんけ下よろこひ北山の松乃みとりはもちて花か千代

左方

左大臣とも藐姑射の松之数残の院いふ
とくしとを門かくく緑哉

左方弁中納言入之

左大乃こゝや北山乃松のなをいつまても松か
いく行行年をかくまゝや

六十五番

左 持

右近衛大将実量

うつまかいく世の君北山をたうかやすみん住吉の松

右

権中納言資任

昔よふかうぬれぬひし松のみを梅いくよろ住吉の松
まへきしの松をも神威をうれかたや高う
くねもすし

右方弁中納言入之

うつまけの住吉の松いく世北ともひいくとや

といへるをよろしく侍り

六十六番

左 持　　　　権大納言家継

かひもなし菅やまさく松のまつに宮かの菊を縁なき

右 勝　　　　沙弥浄空

家よりひかりさしそふれいかにつきさ山松のいく代の深きま

関白

さいのかみさく山永義の例まつりのちかくだちあり

勝の字をつけ侍りなやと思給とぞ合る

神蔵との御事ハ東永のさしありしなる

やとかかへ侍ると左のかせ仰まかりくまかり侍る

さてめ侍りぬ

菊の井けれ御にかたに

花雲のむしろに菊れなすかん侍らぬかうしく

ままえ侍りと太をかのみつき乃山のかしはら

といふ所とおもひて我よりかつさきのみ色は

かくよろしくままえ侍るも勝と申し

六十七番

左 持　　　　左近衛中将為富朝臣

わきりまね緑のかげに風の来て松ハ雪井の上乃代の色

右　　　　左近衛中将季春朝臣

かげなきのされたよの夜そしいつの松と菊のむもとまれ

関白
両首ニ持分とや

右歌云ひりてめしくを給ひねとよめるか
らりの風雲井の松のうへに立まさりぬへく
見給ひねハ左の勝とや申し侍らめ

六十八番

左 勝　　　権中納言教季

十かへり花のあるしめる所有北浦の北松よりかけ白浪

右 持　　　左兵衛督首俊朝臣

うこきなき君か代をして出松のかひ姫の浪しきて
みさき

関白
左右両首共ニ勝負なしく給はる十

みりの花のあしぬかかりて一てありてまこえ
給まし八まさりてや給へん
参議井中納言の左
左大臣ハ千世をもかくしく給ひて右大臣心あり
まなまさり見え給りや

六十九番

左 持　　　参議政賢

右　　　右近衛中将従実羽臣

糧蒔しえの世なる北成るれや萬もと見えと高砂の松
なあそハ神代乃むかしといてまし手をそへつゆの信太の杜

関白
このあひかひの松をし北久近あるかくくも見え也

高しもよそにやまさる松のかや

右方奉行川を入に

右方ハかりそけの松也いへともいてまし昔も

かくや住吉の月といふ方よ似たしくかたちハ

らとゆゑや左方雖たく八勝ヰまうて勝

とゝも

七十番

左 おれ　左衛督侍従

限なく年をつもりの浦にこそまつかひあらしきよをもいのらん

右　散位伊忠朝臣

庭はけのかそへやさこえの北露の松花咲待也万代の色

[illegible]

左方年をつもりの浦とかくいひし勝きし

その心ハ右乃初夕も生ふるてや待らん

右方弁中納言入に

左方年をつもりの浦と云く大も初の文字

きようにしきハ何とそにくゝ存候也

七十一番

左 お

君をりか神路の山比松のかけあふくをさの世ハぬに

右 勝　右近衛権中将公澄朝臣

ころ山かとも乃さか松も今男とやまはんと

[illegible]

右をこそ山不庭袋りや左を勝へきよしゝ

まつや

兵部卿師兼乃左

左あふくへき代を此世にへぬへしといつかやちよまつえ

かくゆくしん右ハまさり侍らん

七十二番

左 勝　左兵衛督依永親朝臣

あふきみるわか君をさかゆく松かえの緑の羽にいくちよかへん

右　民部権大輔行秀

君か代ハ此世をも何とさまれるのなれは出えねの松は ちよりそ

判者

左松かえの緑の羽よしとも見つきいさしかお

いつかしく侍り右さてまさるへからぬはいかなるも

ましまりしまや此緑苔を論すかにいとあやまる

兵部卿師兼乃左

右ハ此世をも何かさしれたのといふ心をつくして

きこゆるも哉二つともや侍らん左を勝とすへき

事なれと猶ころへくや

七十三番

左 持　権右中弁親長朝臣

小塩山かゝめる松は千年猶代はちよのきはめあらん

右　右近衛中将房郷朝臣

松の色のよの世をつくるに見えにけりくもゐくもゐ

関白

左萬代なちのきさゝまへ侍りかまくもかくて侍り

たのまれしむかしをわすれぬこのまつのしかぬらんかた
むかしのぬきの根のさかえいまも花の緑なる
菊亭并中御門入之
いつまでもあらましを行り

七十四番

左　持　　左近衛中将實右朝臣

まれなるをとやの山路花の色もみてやちきらむ千歳の松

右　　藏人式部丞源政仲

至日
年をへてちかひも絶えぬ緑の色の松のすゑ
ときはの山路花の色のみどりの松のすゑいつ
までもかはらぬやまのちぎり

菊亭并中御門入之
ときはの山路花緑の色の松のすゑいつき
とおもしりをやよへなん

七十五番

左　勝　　二條

年経れはたえぬひかりも緑なる緑の色の松の末八

右　　侍従持為

判詞
いく世へてさかゆる巌にたちそひて松の花の
右のさかえ二葉よりみどりをさかゆる
のたえぬ君か代かしくらみ
花の緑をみよとみるのみ

松の老木ハなとゆかし上古の風まさおかなりき
つらさも緑のみとりひさしや千代ん若菜の
末の世をひさしうこれさへうハまさりのこりを
つとと感情さハすうりなくして猶のよしこ
やゆかし
柳寄あるもハ寛平の御時にひさしきのつ
いさもしれ天暦の御時にけうりまさる
あまたさるしとてまて後若原の代にも
もしぬりてあさひかにして数寄の家とも
たえさりなきかさらぬふるうとハへともたえぬさら

の有心判すの事ハこれさうひとつ入りちてむと
乃句まりかくまとれもさうときへ人のゆかさ
もさいかさとりしの句ふハ元末としあしを何ち
山の井にあいさあらきさてともうのまえるあり
けりあらりよいまままくのうちかさとよけのまこ
うきさなりとハしと家よつさうの風ふしもあ
らしと中禁のふ林のみをよあまふといへる何よ
さうとへき花もこひとていゑやこのこゑもハ
うけの題ハまろ何のまつりさとゆうかうや
まとふえらりまむしつさきの秋露井の月

とむらひゆへ主のそのゑんまりの御ときの
くおしいは前と釋契のあいかやらし
其うき奏障此かたよりきんすそのものへ
まいまゐつは今日のいとぬとうといへともかさく
ちくのかさるまともまゐれしとてかきかりけれ
はかすくのりと此名ほくかよさうり公の御への
うちをもちかふかるを之てそいら手にきこ
ろしめしなきうかかりんさくあわ名の列つく
まつりへさいかりせをとこもを絶つるよつなそこれ
とふくの童戸せいそのそまし海こそゆめし

なかしみなまつけ給ましいこのまちまて
てあさく覚給うくまをまうそくまき
いまりいよくよしあしてまたそれぬへくはる
みてもまり川のかきまちともまゐむへくこえとみ
かく此名まる河此之へきくらのさるへとしまろ
こひ給ましいかりてそてきよするも世そり
すれけるあてもて勅とそもりさらいうるよ
のち此日此あさまそりてまてさりのをのし
よしはしをまろいうり此もののことせて此記よ
いえてそおよるをのかく此まつの先

末ゐとよいくとせつもりへきかきりそ知らす
ねかひも花乃陰

宰相典侍
式部卿親王
右近大将實量
大宰権帥實雅
沙弥浄空
権中納言賢任
権中納言公經
右兵衛督雅親
前甲斐守明茂朝臣
散位伊忠朝臣

勝四持一
勝四持一
勝一持一負三
勝一持三負一
勝一持四
勝一持四
勝一持一負三
負二持二負一
持四負一
負二持一負一
勝一持四
持三負二
負二持二負一
持四負一
負一持二負一
負一持四
勝一持三負一
勝二持一負二
持四負一
勝二持一負一

二條

按察使公保
権大納言宗継
沙弥祐雅
右兵衛督持季
権中納言教季
侍従持為
参議政賢
左兵衛佐有俊朝臣
権右中弁親長朝臣

勝二持三
勝二持三
持五
勝二持三
勝一持三負一
持四負一
持一負一
負五
負一持四
負一持四
勝一持二負二
持三負二
勝一持二負二
勝二持三負一
負一持一負二
負二持二負一
負二持一負一
負二持二負一
持三負二
勝一持三負二

左近衛中将為富朝臣
右近衛中将経夫朝臣
左近中将季春朝臣
右近衛少将公澄朝臣
民部権大輔行秀

勝一持四
勝二持二負一
持四負一
勝一持三負一
勝二持二負一
持一負四
勝二持二負一
勝四負一
勝一持三負一
持三負二

左兵衛佐永親朝臣
右近中将房長朝臣
右近中将実名朝臣
法印堯孝
蔵人式部丞源政仲

勝一持四
勝三持一負一
勝一持三
持三負二
勝一持三負一
勝二持三
勝二持二負一
勝二持一負二
持四負一
持四負一

續歌合部類巻之二十九

百番歌合　宝徳三年八月十三日

題

雨中荻　秋夕情　松月幽　塩屋月
暮秋虫　忍涙恋　契待恋　根絶恋
旅宿夢　名所鶴

作者

左

式部卿宮
前大僧正満

續庫

前大僧正　義
右大臣
権大納言
大宰権帥實雅
沙弥祐雅
権中納言資任
右衛門督雅親
雅康
右
関白

前内大臣　公
内大臣
沙弥浄空
権中納言持為
権中納言勝光
為富朝臣
法印増運
大僧都義観
法印堯孝

題 雨中萩

一番

左　　　　右衛門督雅親

かすかにも雨しかきこえてひし秋風にしほれてさきそふ庭の萩原

右　　　　權中納言持爲

庭つゝみことのまゝにて雨つゝむなかとしもとて萩の葉風

左歌旅の雨に立萩そこえりたえしさま〳〵にも侍り
右斉しもかきこえ侍りねと雨つゝむ哉
よさらて聞ゆる左いさゝかまさり侍るにや

二番

二　左　　　　式部卿

野風のをとこそかはりし萩のうへのつゆさえしさむき露の夕

右　　　　沙弥浄空

夕のまへしをるこれは野風のいつまよふの露の下萩

左右ともに心あるさまにて侍を左はよし

まされるにやいふへしさてこそ左の勝

三番

左　　　　右大臣

夕されは虫とはいはし萩の上に風吹わたる庭の秋かせ

右　　　　法印増運

冬ことに庭の萩原吹夕風吹わたる露そ散て

左哥ともにしく虫といへる涼しけなり

右の歌の庭吹わたるのいふにや侍れ

右はかゝる難も侍れは左の勝にこそ

四番

左　　　　前大僧正　道

風よりも露はさきにや萩の葉のうへにかゝれる露のしのふらん

右　　　　内大臣

風の音もさむく夕暮ふくる風にこそ夕まくれこそ秋の萩の末

右歌はいつれもなきほとに侍るとかや

こゝやまよそへ侍り右の哥も難なくは
侍れとも猶左まさりてや侍らん

五番

左　　　権大納言

笹繁き野辺の風は吹そふ露ちる庭の萩はら

右　　　関白

風寒の村雨すくる萩の葉しのきやまかの秋風

左哥の村雨すくるとみえてたかくおもしく侍れは
ことにおかしく侍るとの萩の風勝劣
ことに持とや申へくや

六番

左　　　沙弥祐雅

露ちりつるとおちて萩のえに村雨すくれは秋風そふく

右　　　前内大臣

吹すさふ風はおのゝやとりて露よともなく庭の萩原

左の哥露とりておもはなるゝよおかしうつかうまつり侍り
右も難なきうへは勝へきよしにて

七番

左　　　大宰権帥実雅

分入ても末こす風の音はして村雨かゝる宿の下萩

右　　権中納言勝光

今こそしられたの雨の名さへ荒風のさはつる萩の
つゆと

左末こす風のといひ村雨とよりとなと
侍る優に世の右も難は侍らねど
左よろしくや

八番

左　　前大僧正　義

払ふ萩の葉ふ風の吹かへし雨も降てそよぐ
なり

右　　法印堯孝

露そふる萩は風にも乱れて雨の
音

左歌も侍るにやといひ大風も吹かへす
かへりてわりなく侍り右歌の萩の風も
手こゝろすてゝよく侍るを以て持とや申さん

九番

左　　権中納言資任

いつよりも露は中々をきまさり秋にこほるゝ
夜の露

右　　[illegible]朝臣

東屋の軒の下萩をしく也雨うちそゝぐ露とやとして

左歌は中にもまさり侍るにや中々の
詞をいひかなへても吹のかめてやうに侍るにて

才覚なくて耳にたちて此歌からの
字にて御法に及侍らぬにもあらずやに侍
るは右の申すなるへて持なとしるへく

十番

左　　雅康

露をく秋の萩の村雨やいかにあはれ風にかはらぬ

右　　大僧都義観

村雨の音してそ吹ゆて露にそ見えし萩の上風
さる大きもにてなりぬものて侍る程
にてしも持にて侍なん

十一番　秋夕情

左　　前大僧正義

ものおもふ心は侍らねとさもこそなさけ秋の夕暮

右　　御涼浄空

立ち心は見えし雲にかかる光の煙旅の夕暮
左歌の心は末の句にて方はなし
右は心は見えしねにかなひたるを見え
侍り妖艶にしてあはれにみえ侍るを
猶よろしくもいひなし見え侍れはいにしへ
まさるなと申へくや

十二番

左　　　　権大納言

なべて世に秋をしらする時ぞとは夕暮ごとや思ひ知らん

右　　　　権中納言持為

月は秋何によりてかさしもかくしも思ひつゝよ秋の夕暮

左哥の夕暮ごとや思ひ知らんと
いへる詞によりて聞え侍るを
ことわりぬべしと見え侍る左の勝とや
申べくや

十三番

左　　　　雅康

秋風にさそふ雲は空に消て夕日さしそふ神の家けさ

右　　　　為富朝臣

雲はてゝ家はしらずともゆふかげの神さびわたる秋風ぞ吹

左哥ことがら雅にみえ侍るこゝろもにほひ
有ける秋の夕ことにわかれし侍る事に顕
めでたき哥なりて猶やさしく侍るべきにて
左の勝にて

十四番

左　　　　権中納言資任

まそでにも秋の夕は旅ならぬ身もくるしきや入相の鐘

右　　法印増運

荻の葉にむすひし露は秋ならん嫉の夕暮

たれつゝぬる入相のかねにこゝろえ侍るを

右のこと浅なるひとおもてすへきにおもひの侍

の風情にしまさるへうや侍らん

十五番

左　　源保秋雅

身をとゝく恨は涙となりぬらん心つくしの秋の夕暮

右　　内大臣

うきことのかなしきにも涙や心つくしの秋の夕暮

左右ともに心つくしの秋の夕暮をおきて同

し事なるに右は猶まさりて侍りて

侍れは勝つへきにや

十六番

左　　式部卿

来ぬしみくる夕暮しらしと忘ぬ人の秋の衣は

右　　関白

いつまてか年もゝとせを涙して又秋の夕暮

左右わりなくすゝみ侍るとも右の年ふりし

ものとみえてあはれに侍るは勝と侍て

十七番

左　　　　太宰権帥実雅

夕まくれ色のちくさに移り行かはらぬ秋の露そしらん

右　　　　法印尭孝

袖つゆのやとりのそてにわかるゝ道すかゝる秋の夕暮

左色のちくさよろしくみえ侍るとなん

右露のやとりのそてにうつゝかへしいとゆふかた

とかくへつゝ夜の色にて見え侍り持とそや

十八番

左　　　　前大僧正

うかていてみえんとふく夕暮に秋とふくすのやとさきと思ふらん

右　　　　前内大臣

なをさりは心の孤舟の哀さしきそまことの秋の夕暮

左旅とよりのやまとわりす中か

右又きをそまことの秋の夕暮も郭に

きよきそ持ちて侍るとも持ちて侍らん

十九番

左　　　　大納言雅親

うきものへは浪にといはしすかのさとの風に秋の夕暮

右　　　　大僧都義観

なをてらす草木の色も添ふらん我身ならねと秋のゆふ暮

さらぬたに袖そたえぬ捧衣も云物思ふよ草の

原に露をまさて難にといはましらは言ひ

左右ともに千里を我身ひとつの秋にいひ好

と読る歌と云ふる世の中に似たれと持

よろしく持

十番

左　　右大臣

山深き世をいとひても[illegible]の秋はのさひしさの[illegible]

右　　権中納言勝定

侘ひとはたそかれ時の夕暮[illegible]は秋と[illegible]

左歌は月のひかりまてさひしくは侍れとも

いはれ秋の夕暮といこの里のこの

夕暮ひとつに見えて[illegible]

右も侘ひとはさらに夕暮はさる事に侍れと

さそひて何かしらも侘しくは[illegible]

よろしく侍るにこそ持となるや

十一番　　松月幽

左　　御製祐雅

奥山の松のした露[illegible]月や[illegible]の秋の

右　　関白

住人のいさやすまん山の松のはふくの月をとく かさ
さよ更れ松のはふく月いつまてすゝれハ
これ侍るを左勝候と申侍るを右勝侍
廿二番
左　雅康
晴やらぬはけしの月をとやさこゆる松の木の下よ
右　前内大臣
吹はらふ嵐と松の木風にもゝきても月の影て
松の木風にたえたえすてよはすれ侍るを
右哥のいてさきや侍らん大嵐と松の

ことさらまさり今すこしまさるとやつや
廿三番
左　権大納言
すみそふ木風にさとつゝ松をえ浅くしもゝこさ月のけかし
右　内大臣
風わたる山の松のたえまより月の出のほとゝも
右哥松しくえ侍るも左もおれ浅侍
このかたにいわつねと思ひくい月の出の程も
とかく欲る月かてのくれをも衆えつゝ
前侍る題のへんへくはかなにつゝやてたん

の勝とすへし

次四番

左　　　　　　　　　　前大僧正義

住人のへたてしそれ月は浅茅か末にかくれ松のね覚

右　　　　　　　　　　権中納言持為

一本の松に有明の月よさりの夜の旅ねはいかにふか山の

左哥は一本の松に月やとる旅の旅ねはなともさひしき

右は松の月よそにみえて題の心いかなると

けふの作り出の事にかなと付給つることと見

給ふにつきて左の木間よりも見えたるすかたを

は勝とす

次五番

左　　　　　　　　　　右衛門督雅親

寺ちかく山もとしもれてかねの声にきこえて木の間の月そさひしき

右　　　　　　　　　　沙弥浄空

松かえに月のかけみえて浅松かえの木の間の月

左哥は寺もとにかよひの松風にかけて侍り

ところとかかたはらにことならすとも作りいふにかや

峰の松の右もそこはかとなくきこえていかなる浅

松かえの木の葉のくもりとて侍よりも心はあなたの勝

侍へし

次六番

左　　　太大臣

庭まて月あかのかけハ木の間もりくるみねの松原

右　　　法印覚孝

くまなかりし松かねのうへの尾の上の風にふく月をさそふ

左まきれハ世をえたる右も何とはいさえに

おもひてもせさへかへるといつそ浪もゆかり風ゆく

風かくハ吹てみえしも志侍れとて是

なつかしきも松はえ侍るは左勝にそ

廿七番

左　　　式部卿文

紀にしてつね松やかぬるのまりの月のかけしてもみし

右　　　大僧都義観

松の緑も色ぬまま風ハみちもわたてとをあけのけさかさなく

さる大方にところの難も見え侍るほと持

とすへし

廿八番

左　　　権中納言資任

松かきも影ハ月ハ千たひて秋風なこそふかぬ秋風吹

右　　　権中納言勝光

ところもあさて月はるいつるへ影この松やえの山

左たゞよみてよ思のしんかなしかはりゆく節の
ことなる事も侍らねば持にはとのこそ
にやこれも持とて侍らん

廿九番

左　　　　前大僧正　快

月をさて秋の西へと思ひても雲ゐのよそに見えし秋の

右　　　　為富朝臣　杉京

又ならん立てるを浅の影しらず月夜の松の下庵

左の月夜石被露左でも持
くもりもなくてゆる雲の夜とともにつきぬとぞなる
ふるしく侍れば勝と申へし

卅番

左　　　　大宰権帥季雅

紫ふかき桜が木の風をやとりし月の秋の色をこそしれ

右　　　　法印増運

かゝるこそ影の松にもとりぬる月の秋の山里

左月の秋の色をもしれとこそ月よ
なほ秋の山里侍て心にもよく侍りかは
して勝劣なしとも申しがたし　可為持

卅一番　　塩屋月

左　　　　　　式部卿よし

秋も猶あかすそすみしほかまの月かけはさやかにあしほやく塩やまは

右　　　　　　内大臣

月も今くもらて見しやうしもしらぬ塩屋の煙のくもと

左歌月に不善煙たちて塩かまといつゝか

侍るゆへ右も月も今くもらて見えし

かたもなくよろしく侍るとて持にて侍り

廿二番

左　　　　　　沙弥秋雅

心あてにやくもしほといふみえて夕塩の煙そひさぬ秋の月けり

右　　　　　　法印堯孝

煙さへ猶しもまれぬよそに月かけかすむ秋の浦人

左右のうた右はすこしまさりて見え侍り

廿三番

左　　　　　　大納言雅親

夕はおりゐる塩焼やくさもそよふる海人の秋の月をとらさて

右　　　　　　関白

波の上三かくしほの袖もやとる月さへ煙の雲そかゝり

左なほは三かやうしもとて月とふ人右も

三かくしほ袖の月そ煙をはへとて侍りしもよろしく

此のえ作りはさやうなるにつきてたちまさり
やとや申へからん

廿四番

左　前大僧正　海

煙さへたちのほらぬか寺は須磨の浦に塩やく海士の月を見てまし

右　権中納言持為

月をそ塩やく煙えてしもうすむあまの袂と
左歌こそちらぬかしは須磨の浦の月左
すゑの句あまのとまやたえすよくみゆ
此のえ作れし可為持

廿五番

左　内大臣

秋ふかきつらね浪にて月とさへ煙にうつる里の浦人

右　為富朝臣

月やすむうつらさ煙てしうきて塩かまもなく
左歌あはれ浪かしは須磨の浦にて
右又月やつて年にさらゆて此のえ作まさり
持にこそ侍らめ

廿六番

左　権大納言

焼しほのしりへの烟立こえて月もかすむよ半の浦人

右　前内大臣

浦さえてうきよをよそに見ん月ハいとふ烟も絶ぬるの浦風

左の歌事ハなきにしもあらねと姿優に

判の右ハ大烟とさこそあらめなさけの立所やも

おなしき手侍とハ持とそつくへき

卅七番

左　雅康

ミなとえや烟のすゑや稀ならん新玉のなかき月と見え

右　法印増運

立なから若のゆくゑに蜑人の塩焼烟ハ絶ぬる

左烟の色からに侍らんとハ思ふにそや

判の右大なるへ事も判見えねハ又同し

ほとのことやいふらん

卅八番

左　太宰権師実雅

りは焼烟ハ宛に立添てとまりの月に浦風そ吹

右　大僧都義観

もしほ焼烟とすまの浦にそのかへしも月にまとゐらん

左ともに月に浦風そ吹添るかたへハよ

なとこのうたもに雅かくゆゑ持にて侍へし

卅九番

左　　　　　　　前大僧正　義

月みるも檜と又やこりなき塩竈に三いそしの瀧らん

右　　　　　　　権中納言勝光

あさほらけの塩やきそてにみる檜よやつけ月影の

たれ檜と又やこりすまさしの塩竈すらは三いそし

ひとつもしれしくゆゑ右檜はやけす

新月もみところなきにいへりゆゑ持にて

たれまさるへからん

四十番

左　　　　　　　権中納言資任

忘れはよ雅の塞の塞の逢やさ都の月のみはてゝならへし

右　　　　　　　沙弥浄空

檜そて月とさそめ塞へし雨のやも塩のかくる鐘ぬる

左なは路の塞のとまやさむらひのあなたにかへし

さて侍る右初の文字のは檜てそいへから

耳なくもて歌よく侍る左の勝よや

四十一番

左　　　　　善雄法　　　権大納言

細くよはむしの聲よはさへ名白氣よひくり言の旅の 也
右　　　沙彌淨空
うすて秋し別るる野にかくるいとあかす虫の聲
左虫の孫よはきさへ名白けなとゝいへる心ゝし
くゆめ見えて侍なるかうへ右の孫くれて
虫の孫よはさて白氣餘情もあはれに聞
えてまさるとや申へし

四十二番

左　　　太宰權帥實雅
旅ねしてよ久霜まよふ草枕原かるしかるき虫の聲 小

右　　　関白
きりきりす旅ね守しるの袖なれはにそてに哀れよりせにいる虫の聲 小
左はまとへはかりてなそもわかすせのみえ
侍るに右の袖とはまさり侍る 右勝 申へし

四十三番

左　　　右衛門督雅親
うらむ也花の草波に手枕して旅ねの床の枕虫の聲

右　　　法印堯孝
せみなきに声の孫よみ虫の聲あはれなるかな秋の霜 夜半
花すゝき草波ゝ手すこゆる秋の床の枕虫

人をまつ宿りには侍りたれども長なる様なれ
いかゞみえ侍りて宮城野の虫の声
まけても侍るべし

四十四番

左　　　　前大僧正義

蓬生のまくらの露はふかけれど秋より後て霜を頼みん

右　　　　内大臣

行秋の霜のわかるゝ虫の音をとめてもさきにかれんと
左の歌蓬の枕の霜に秋より後も頼もしく侍るを
頼みがたく[illegible]ふかゝりて[illegible]かたくや侍らむ

右も秋の霜と虫の音をきゝて侍る歌と心
てまあらしわかりて侍り又見えて侍るらと行秋
の霜よりも左の歌見えてよろしく侍るに
勝にして

四十五番

左　　　　内大臣

長月の末は秋なき霜よりも床に枕して虫の鳴くらん

右　　　　権中納言持為

雄々しく鳴く虫の声も野ゝ寒てや露のみそその風
左は上の句ゐおちてそ見えて侍るや右勝る字不

庭の枝に結ひ捨てつくや

四十六番

左

萱も旅のやとりは乱れあふとて　露わけ虫の声すて

沙弥祐雅

右

大僧都義観

こさかし旅の床これあさちふにあるかなしの上て

秋のよを思ふのあさちふにあるかそれなかて

なをいつるよるし　可為勝

四十七番

左

式部卿主

野へいとや霜ほととれ旅の名からとふく旅虫の声

右

為富朝臣

草にほく比よりかとてら秋の霜のかはに虫そ啼か

たゝ名おろとかく旅虫とてし大霜の花し

おもいつろ河まて旅みなとい捨てつや

四十八番

左

権中納言資任

秋かさ籬の草しらかれて虫の旅よわきとる　そのあさちふ

右

前内大臣

り秋のまましてをする蓬ののらくらやまつゆのうら院

右さやかにしもきこえす左かたの句優
にゝたれは勝にして

四十九番

左　　雅康

露ふかき秋はいなりの山色しるく紅葉の松も虫の聲

右　　権中納言勝光

言切とせられんそ孫て鳴虫の夜のつるに秋そかなしき

左秋はいかんとなれはふかりて松
虫よろしき事にてり右さしるくる也
作る猶左の勝なるへし

五十番

左　　前大僧正海

秋のゝの草の露のかふしの虫の称さへあはれそや

右　　法印増運

旅ねする末のはらの露のの下に御かしらかしの虫の聲

左の句は萬葉にてらしあはすところなれと
おもへはわしく作の右の句のうかし
かりしかなしく勝とさたまりぬけれや

五十一番

左　　忠淡窓

大宰権帥實雅

あやにくに身をかへてもうらやせん我身にかゝる涙なりけれ

左　権中納言持為

今はとてせく水もなくてかはりつる袖の涙の

なかれ人めかはりてとゝめつゝもせきやらぬみえ　同

行方たえんかはせつるしくるゝは袖まとふ人

またいとゝもろかれ恥かたにしもまえ

袖のねはおかてよへくや

五十二番

右　沙弥祐雅

涙川うきせにとゝむ世をこゝろからしも袖にせかるゝ名のみすへ

左　法印増運

いはしても人めみえぬとてうきにとゝめもそゝぐ涙かな

たゝ人目みえしとしのひとめてもそめ

かくれしらるゝ袖の限にもして

五十三番

左　権中納言資任

涙そは袖とすまりにつゝしのひし涙君とはいと云ひあひつき

右　法印堯孝

色にふかく苦露とへはつゐ萩の旅の袖とこそなん

たれかさゆりてとも袖に常にいはれかゝやまと

竹の葉大蔵らの袖ハさらに色ならん侍りて
勝とらへきよし

五十四番

左　式部卿意

三ヶ月迄れ袖にかゝる氷まて涙のこほりなん

右　前内大臣

何ゆへとしのはぬるにはやかる袖の涙の色なりし

右大臣の袖の涙たゝいかなりしとも人の色

同しとみの香をとうへたりつるこそよ

何かとれにまさるとは申へきれかおしてや
つゝや

五十五番

左　大蔵卿雅親

涙そいかゝる涙にもえるしもへまつとてはしゝめのとも枕

右　為富朝臣

袖のしらぬ湖とかくもしてこんなわすれめつすゑ涙かな

左右ともにふとしくきてもゆかぬ侍す

右も何とてもゆかぬとしてこそこそん

とりわいゆきておひみえ侍ゆとはおかしきへし

五十六番

左　前大僧正義

こしてやわらぬ涙かなへはしせて袖とてもわかし　ひとしにあ

右　　関白

袖かこよへ波の関もてくるしやへかね日　しるし

左右とにはるるはしたとわかぬ涙と

何かやわかる涙にもとおもかるく侍之

何の右の涙とも波のこ流もまるとも勝之

五十七番

左　　雅康

ときあへぬ涙の露とりはしてあふ彼の行や宋なん

右　　内大臣

いさらん露こそてやとらん月にとりし袖の白も

左右みなましてさや事もなうらしかる

何もなく手おふきへきん

五十八番

左　　権大納言

ちらしてしみ涙のいとやりこぬさきころ　ひつけゆえに

右　　権中納言勝光

心しかる涙てつれ折たかの彼を身せうてた

たれかまこぬさきらかむりてはつきくるさかり

左は尚何もわかりぬも海あと折なの涙

ぬれけんふかくかのえ給ふは勝とやいふへし

五十九番

左　　前大僧正尊応

よろつ代に神の水とるしるしとや人のつくるの流なるらん

右　　沙弥浄空

みそきせん人のこころ名とそいはせてや我身の流もとり

たえへかつつわしまてもちて人の名とそいひて吉凉とてかんかかまつとやいふへし大の勝にそて

六十番

左　　太政大臣

ところみ吉神のこころ下にて流人は未来何をかみえ

右　　大僧都義観

神代より流れの水のとりやせき流れも時は吉身知らん

これ我神のことはいへは猶のなをしらすあはれさすか大かた何しも離れくは侍るとしかるにいまはけてしも侍なん

六十一番

左　　前侍従

契りをとしし人のこころのいかならんも我もあはれのことわりと

右　　雅康

左　　関白

今こんと夕の風にしらしまつ人の心のかよふ空の雲

たえす吹風も待宵やさしみされは

たゝさへかゝる物思ふ身はまつよとやつらや

六十二番

右　　前大僧正　同

身をすてゝ待逢へりぬるましとこそ長き夜をこの秋もくるしさ

左　　権中納言勝光

今こんとこの夕くれの秋しまてやいふらん誰のこゑ

きゝたしてうらみし物をとまるそやいふ

身をしも待逢へりぬらましいまへるかとや思ふらん

六十三番

右　　権中納言資任

人ことに待暮しこよひの月のあはれにそたのむ夕暮

左　　権中納言持房

思ひそて待暮しもしられぬ心のうちのまつ身の

たのめおく人こそよその夕くれのかなしさ

身の中にしもこそまつくるしさの

たれかまつ物をとやつらや

六十四番

左　　　　　前大僧正義

よのなかをいとひてすみしたにもえりしうけれ(?)

右　　　大僧都義観

こゑにのみまちさしくれはさつきやなつのゝ(?)

左右心とゝのへ侍りたてこそ

猶よきとし　持とや

六十五番

左　　　沙弥祐雅

えとにまかへとひしもとかなとくすなのよ

右　　　為富朝臣

今めかしきこゆる姿なれ殊の外にまさりて

たかきりのやとは(?)つゝしむへし

猶よきはいまさり侍らん

六十六番

左　　　大宰権帥実雅

こゝろいとくらへへ(?)ものをそへやはわらし

右　　　沙弥浄空

あまつかみのねかはかわするゝ人のまかりまかへ

たかわりにへたにていかにしく侍れ

侍りたもし右はまさりて侍れとも

みえ侍るといへるもさることにてをかしくや

六十七番

左　権大納言

すみのえとものとし浦にゆふかけてつきさえて

右　法印堯孝

花の色も時しきりへぬ後の世をさそふすきよひすく近こよかり

さる人の事ののしる左は草にとく

下まさりとやや申へからん

六十八番

左　式部卿宮

られたる宿にも月影のよの後さえらん

右　法印増運

涼しさはやしほに清くても空の秋の月かけ

左哉とるまさにもとやといはれしく

これも右守なるとも見え侍り孫は

左の勝にや

六十九番

左　右大臣

うき雲の風にそ人は稚しきよりて落葉の音

右　内大臣

よのまくこそいふへきむかしは難波わたりを行かうてく
左の雅親まさるといひけるにしく侍るとなり
すへしといふあそひかとしいふまて
くもりさくやたくしさせ事侍るす
おもしろくや侍らん

七十番

左　右衛門督雅親

やそかはをこえたるまつの葉かけの行よはゝの橋の
　下くく

右　前内大臣

こよひまては何かといふへしとのゝ月も
　けそ見り

さしかゝれるをはいまさへきたのよの月さも
にほしく侍るに又持にて侍らん

七十一番　恨絶恋

左　前大僧正　海

うらみこしとしも見えぬ枯まてもそふく千はの風
　よ守

右　大僧都　覚観

うらしまかつまにて恵まる風をかの風のさ
　けりは
左のもえすたいこと見えるにまてそそ
とりは大ひはふにて何の見えはの
くしす侍まてし　持と申へし

七十二番

左　　前大僧正慈鎮

根にもあらぬますかゝのやまつれけはつゝ

右

り淺みとりのかけて春風のつゝさすすらんよりそ

さらぬ顔のくさくさ若草ちらる

みてあらす侘つと根のへそつゝさ

平生てはゝ侘人のさ花はいまけても侘らん

七十三番

左

式部卿宗

淮南のつまに深く根をてかゝるとしはらしつらん

右　　法印亮孝

即をかるまさらて縄も橋もあらた若寺やとそ

右ゆ百方の心たれしゝせえ侘るとある

そ偲にしも侘ぬたる世のつゝさに

くつねとひいうつとるにたとし侘つゝを

へりいさる浦さらさや門侘らん

七十四番

左　　大宰權帥實雅

隔ひさしき春への水ま長根侘るゝ笑みゝりきらん

右　前内大臣

煙やへなてしこえみはわま風しさとの音は侍らは まし

左右のことのうへ顔の心もしりかたう

えそなもにんみえねまとは持とかへし

七十五番

左　海深秋雅

秋よ今うけん御こもとあらさてと風や恨むしの こ梢

右　御深淨宣

つまちにはそえ御こめかすみつゝちさらねは いさんさや

右かれくすゝつはにましのつゝ偏ひてし

かなひさくや右の勝とそ

七十六番

左　左衛門督雅親

うきしとさとり袖のうさけにふかくしもそ置ぬる

右　権中納言勝光

うきつらさへとおもふもあまて夜半中と秋歌は

左うらしとさとり袖のうさとひ右ん前

思へと聞ていかさもあまてと何つかれ心あら

しく侍えゆるとんおんあるる須に侍

ましいまさうとや申へきらん

七十七番

左　権中納言資任

[illegible]しとかゝ[illegible]てとふ[illegible]恨にまつ[illegible]恨かな

右　内大臣

[illegible]やさ[illegible]と[illegible]かるし[illegible]人[illegible]

[illegible]て[illegible]も[illegible]

[illegible]して[illegible]

[illegible]とぞ[illegible]やさ[illegible]

七十八番

左　右大臣

[illegible]中の[illegible]

右　関白

中[illegible]の[illegible]も[illegible]の[illegible]

左歌はさもと[illegible]

と[illegible]して[illegible]勝

つきにてこそ

七十九番

左　権大納言

[illegible]中の[illegible]すか[illegible]風の[illegible]

右　法印[illegible]運

かなしや鷺のそてハ浦かせにしほたれてぬれぬらん
左右ともによろしき歌難し侍れとさるへきのさく
すかれてこそ歌まさるよし侍るへきなれとさるを左にて
ことなる難なきよしハ持なとしもや

八十番

左　雅康

うきことのみしけきいにしへ縁てまくすゝ風のをと
　つれそなき

右　権中納言持為

立かへりゆきまよひつゝ夢にそてをしほるも涙そてく
　色しきさ
左歌かへしさねしし君て待すたてたてかれ

まさるのとかあるへしいふにおよはすとそはは
やうに侍れとも心ありて浦なれや勝とすへし

八十一番　旅宿夢

左　右大臣

むすひ来かさつもる夢のよるよしもなくしほ夢のう
　さいし

右　前内大臣

やさしさき風枕にきのよる夢路ハ関のなきと
　このまま
左の夢のうき橋たへの夢ちの関ちしに
難かくゆるのの持なとしもや

八十二番

右　　沙弥祐雅

さそふとてかひあるましき花さそふ風やよひの末のゆくゑ

左　　権中納言持為

かすみねより立出てとふ月の今宵も名残をしみつゝよ

左歌中の詞めいさゝか字あまりしたるのみ

やよひもつくる(?)待けりしやよひのさかり(?)の名残をしみつゝ

なれとも猶ちかき右の勝とや申へし

八十三番

左　　大宰権帥資雅

みなとをわけていく花のかけもくもゝ(?)春の名残

右　　為富朝臣

雲霞ともに海山の春もしらて東路のおもひ こえゆかん

左の歌ハさそはれて心にかくるかたの大てまさる

歌ハ猶ねこそ左の勝とや申侍らん

八十四番

左　　権中納言資任

かすみよりさすまゝに春もとゝめ花もおりける花風そえ さそはしとさ

右　　関白

帰る雁春もまたやかへるらん霞の山の春の夜

左右ともに歌も優に侍れハ可為持也

八十五番

左　　雅康

りうきをもえらぬまてとまつにゆたにゝ山の雪のあらし

右　　沙弥浄宣

つゝからにかゝる夜寒のあらしの雪吹のさへしろく

左歌ははしめのさしもなく右歌は大かたけのさかしき

しもおもしろくは侍るへき

勝負おなしさまに見ゆるは又持とやすへからん

八十六番

左　　前大僧正　満

日数へて麓にあまたゝひ古里ふりにし春風の音ぞ

右　　法印堯孝

あらたなる山のかねの音なしかとよそに棚なし小舟

左かたへをかしき所も侍らぬを大かたの山の

おなしさまにてはかしもすくれ勝とや

八十七番

左　　大納言雅親

勝けしわかれやかはる古郷の雨のはけしき

右　　内大臣

石の墓もとゝぬる底松の月の枕かはしそてに吹こゑ

たれわすれやくはしといひおもひけりまよさはきを
ようきさにゆきて太下のりとてもありしに
ゆうえ侍と左右の歌たしかに偽なしとは非
よ侍といひ勝とやいふへし

八十八番

左　　　　式部少輔文

うつもれぬなをとゝめむ古里の人やすゝむる寒の同し

右　　　　権中納言顕光

夢ちよりかれにしひとの枕もとりあまりしにつゝきて　うさこ

右大いつまてもみかくれ侍とも左右の歌はよ

これも侍らしハ左可為勝

八十九番

左　　　　前大僧正覚義

なにとそ人まち山のあるにふけてはらみさめ　由絲

右　　　　法印増運

なきはし我おもともかなぬすの夢や夜とに契りつゝ　[illegible]
かきていなむ夢の分もしらまつくらい侍り

九十番

左　　　　権大納言

いはれなるものしはなかくをゆゝの枕よ[illegible]

右　　大僧都義観

峯あらふかせにさそはれ花をさへ日枝とふかき雲風の

左右ともにさる事も次第大かた落ら

にけりとはいひつゝ侍れは持とや申へし

九十一番　名所鶴

左　　雅康

和歌の浦やさしてしほみちけふも世をへて友鶴の　ゆふ声

右　　法印堯孝

二はしらの御代にまれなる長き代につたへてきくよろつの　たつ波

左右ともにきこゆしこと侍しも侍れ持とそや新

此浦ちとせの例ある此御代のことに侍るやなり

似るもの鶴持にしや持とや申へられ

九十二番

左　　沙弥祐雅

和歌の浦や思ひし事をしのひつゝいへはまかせん

右　　権中納言勝光

すれのまにちとせと思ひし鶴のきみもつかいぬ代　の行末

左右判もののてにはなき侍り紀のやまい

あやまてるの侍しへし侍るとするとも持の

姿てまさる君の行末かなのすも勝へし

もはへらすなん以左為勝

九十三番

左　大宰権帥実雅

玉津嶋にしほ干るかたのまゝひかて世をへてすまひもえそさえん

右　内大臣

和歌のうらにしつみし身にはすみよしの鶴のこゑの
たまの浦にきこえつるかなともひしらそ
よろしく侍るを右も負なしにすくるの鶴
おなしくはいみえ侍らは持にて侍なん

九十四番

左　権大納言

うら嶋よりこく磯浪の友つるもしらすわかゆへに鶴

右　房高朝臣

けふのしも松のことのは千代まてをそあはれみつる
左もつまもなけとも右の歌はすきる
ことも侍らねと松のことのは千代まてをほめ
うる時よそひて侍みえ侍らはおほかちとや

九十五番

左　前大僧正　義

こゑのみそのつゐによみてそ千世かはかなしそ鶴らん

右　前内大臣

しるしあれ人のこゝろもかはらぬ世にわすれなさるなる跡
ありあけもにわかれ千世の古跡をとゝむへし

九十六番

左　式部卿文

あまくもや志賀のこほりにわかるらん松よりさきにかゝるうらつ

右　権中納言持房

まことにいはとつけおきし千代のふるさとよりもかすみのうらつ
在昔のけふり露ともにいはぬもいはぬと

右方二三首優にしけき此方の句持と勝下句歌
なくはやみてへて又持とすへし

九十七番

左　権中納言資任

人なきは世もちはまてもさかえてきぬ春のはなたちかはらん春のうらつ

右　大膳部義観

契ありし君の代をいまのこの世とまつよりもゆかしき春のうらつ
右もとしらねきさとてまつまてもはなかれてはなし

ほとくやみへからん

九十八番

左　左衛門督雅親

浪こゆる世としもしらてちきりけむすゑの松山ならん

右　法印増運

すゑ遠く猶ちかひけるかけまくもかしこき世々のたえぬ

左右の歌ともにその世とあふき末遠き

道をまもるにはいかにか侍りけむ又も

持とや侍らん

九十九番

左　右大臣

いは清水声もたえせぬなかれの世とともにこそすまん宮ゐは

右　御法印宣

左歌のことはりはかねてさもとこそ心えられ侍れは

右歌もさもとこそおもひたまへ侍りけるに

この歌の撰集にも侍るを右歌の心をも

よく思ひいれて書出したるにや

まてわか左歌もさるへき故は侍らねと

右まさりてや

百番

左　前大僧正　兼

松の風はけしくてみねの山にたへぬをとこそきけ

右　関白

長哥はまさき道に繋りし玉くし山の露みなれは
たまもかれ先山に鳥の毛衣緑毛を見ひ
まも侍れ哉しく此句も大てかなき道に玉
のさ山とみりまも侍りぬるとも有りまか
招して然へし

判者　沙弥祐雅

寳徳三年八月十一日

写本云
此一冊祖父葉雅若年
筆跡候哉猶可加一覧候也
蜡月初九
正二位雅綱　判

續歌合部類巻之三十

新時代不同謌合上　長禄二年八月初撰

作者

左自萬葉集至金葉集

右自詞花集至續古今集

左

大納言旅人

天智天皇

坂上郎女

惟高親王

右

大納言忠良

光明峯寺摂政 道家公

八條院高倉

惟明親王

文屋康秀
大伴黒主
兼覧王
光孝天皇
在原棟梁
源宗于朝臣
三條右大臣 定方公
藤原興風
天暦御門
太宰大貳 高遠

正三位知家
鴨長明
鎌倉右大臣 實朝公
土御門院
民部卿成範
従三位頼政
西園寺太政大臣 公経公
藤原信實朝臣
順徳院
大納言通具

壬生忠見
源兼忠朝臣
祭主輔親
西宮左大臣 高明公
本院侍従
小大君
藤原高光
藤原義孝
大納言公任
安法法師

藤原隆祐朝臣 家隆息
藤原光俊朝臣
法橋顕昭
雅成親王
新院弁内侍
大納言隆房
俊成卿女
中納言典侍
前内大臣基家公
源師光

清少納言

大納言基良

一番　後花園院御勅撰

左　大納言讓

たちそめし花のまことに[illegible]門[illegible]

右　大納言忠良

おもふ[illegible]の[illegible]五月雨の[illegible]

二番

左

おもひ[illegible]やみ[illegible]白[illegible]

右

夕[illegible]すや宿の[illegible]

三番

左

いやしかりぬる人の子に月見ぬ秘はかなしきもの

右

あはれなき世にありてかくはかなき身の末の露も消なん

四番

左

秋の田のかりほの庵のとまをあらみわか衣手は露にぬれつゝ

天智天皇

右

高砂の峯のゆきゝ〻わかれはかなしきものかは

光明峯寺摂政左大臣道家

五番

左

おく山に紅葉ふみわけ鳴鹿の声きく時そ秋はかなしき

右

いつしかと思ひし松のあたし世の年をふるまてかなしかりけり

六番

左

ぬす人や来ぬと思ひし我なれハ宿をこそ守れとこそ

右

いつまてか思ひ知らぬ世の中にありてはかなき身をまかせん

七番

左　　　坂上郎女

[illegible]

右　　　八條院高倉

[illegible]

八番

左

[illegible]

右

[illegible]

九番

左

[illegible]

右

[illegible]

十番左　　　惟高親王

桜花ちらはちらなむちらすとてふるさと人のきても見なくに

右　　　惟明親王

鶯のなみたのつらゝうちとけてふるすなからや春をしるらん

十一番

左

暮としもなふかゝらんとき世をいとひてもなからん秋をかこちやしさ

右

みやま木の松の梢をわたるなりしもやとふしさかりの秋風

十二番

左

白雲の色もともなひくみよしのゝ山にはさけはすまれぬに

秋右近

右

さみたれやハるゝ日もなきこゝろかな

十三番

左

春の日の光にあたる我なれとかしらの雪となるそ侘しき

文屋康秀

右

谷背はるきはれは東風にとけて春たちぬらし

正三位家隆

十四番

左

吹からに秋の草木のしをるれはむへ山風をあらしといふらむ

右

むさし野ゝ草のゆかりにくさきも今日まてみゆる露のはつ霜

十五番

左

夏[illegible]き霧の紛れにけかくして有明の[illegible]やハ霞

右

[illegible]

十六番

左

春雨のふるハなみたか桜花ちるをおしまぬ人しなけれハ

大伴黒主

右

なかむれハちゝにもの思ふ月に又我身ひとつの峰の松風

鴨長明

十七番

左

[illegible]河ハ初風かよはせてわたると[illegible]や

右

神河も月やそれとハ[illegible]

十八番

左

[illegible]山にまよひて[illegible]

右

[illegible]限[illegible]暮

十九番

左　恵覧王

高砂の[illegible]

右　徳大寺右大臣實能公

[illegible]

廿番

左

[illegible]

右

[illegible]

廿一番

左

[illegible]

右

冬[illegible]

廿二番

左　光孝天皇

君かため春の野に出て若菜つむ我衣手に雪はふりつゝ

右　土御門院

いと[illegible]春の[illegible]朝霞[illegible]

廿三番

左

あかすしてこゝろいかにと思ふらんよるへなきみの袖そぬれける

右

春は花秋はもみちのちりしほり風をいとはぬ木のもとそなき

廿四番

左

うき世にはかとさせりとも見えなくになとかわか身のいてかてにする

右

君ならてたれにか見せむ秋はきのあたらなかゝやの花のいろかを

廿五番

左　在原棟梁

春たてと花もにほはぬ山里はものうかるねにうくひすそなく

右　藤原興風

やまさくら花はむかしの春なからいはねの心人そかはれる

廿六番

左

秋の野の草のたもとか花すゝきほに出てまねく袖とみゆらむ

右

わかやとの秋のゝはきをけさみれはつゆよりさきに花そちりける

廿七番

左

わか恋は牧ふしらぬ白人の風の音のみ絶えぬなりけり

右

名のみして山ほとゝきすなるこそ物思ふ人のやどは尋ねす　摂政

廿八番

左

さきかゝる松のみどりも色そへて今日をかきりの春のなごりか　源家長朝臣

右

みやま木の花を桜とわけてみし桜は花のかけに見ゆらん　従二位家隆

廿九番

左

山里は冬こそさひしさまさりけれ人めも草もかれぬとおもへは

右

住よしの松の嵐はふきにけり遠の月かけそめるあはち島山

三十番

左

東路の佐夜の中山なかなかになにしか人を思ひそめけん　読人

右

人はいさわれは忘れすくれ竹のつるにかれせぬ人の心を

卅一番

左　三條左大臣実房公

秋ふかくてわするゝ比しもことなれや木の葉ちりゆく秋の夜の月

右　西園寺太政大臣公経公

あさみとりいとの柳の糸をよりかけて春にみたるゝ花の香ぞする

卅二番

左

名にしおはゞ夜はの思ひをこゝろみにまつよしもなき人やまつらん

右　従二位家隆

ふるさとや花咲にけり春風にさそはれて行宿の梅かえ

卅三番

左

春雨のふるとも見えて咲初し花のこゝろはわひしかるらん

右

たれとなく文をやおもふ花のえに結ひはなるゝ山かせの袖

卅四番

左　藤原興風

さつきまつ月日はおなしむかしにてなとかはかくもさひしかるらん

右　藤原信実朝臣

くもれなくみなからおもふ山のはにかゝれる月をなにゝたとへん

廿五番

左

理ても総てよ露しく夕暮の月のもとにひかり出るかな

右

下紐もとけぬ思の岩ほかは雪なとこそ下かゝる消えし

廿六番

左

誰ともと君る夕きしら月の影き思かゝるみ

右

思ふこと深くこそふみ見て袖よかりける秋は後

廿七番

左　　天暦御門

今宵こそ心やさらむ我宿に花の月なる影は清けし

右　　頂法院

秋風の文そてうちなれ流れくる思のうちの影なかなか

廿八番

左

あまつかたとなく消ぬる玉も舎も今こそ人にえぬ恋しき

右

いつかの葉の風ふける声も嵐に付けくかけるかな

卅九番

左

祈りこしかひはなくとも世にもなきあらましかはるよしもかな

右

百敷やわか宮こ人かけてみよ紅葉のにしきかさねてそ見る

四十番

左　　　　　太宰大貳高遠

打かへしきみはさためぬ御祓してけふ道の辺にかへりしらなむ

右　　　　　大納言通具

あまた又かはしおもひの池の水そのいはねにはなみそよせける

四十一番

左

白雲のたえまのみ山とみえつるはゆきのまかふ花にそありける

右

春雨の晴行そらにやなきはらかせのかすみそなひかれける

四十二番

左

この風にちりしはなのをちかたにふきしすゑの松の音

右

あかつきにとめし人をまつほとにおもひかねてそ夜はあけにける

四十三番

左　　壬生忠見

やかすとも草はもえなむかすかのをたゝ春の日にまかせたらなむ

右　　藤原清輔朝臣

[illegible]

四十四番

左

さくら花ちりぬる風のなこりには水なき空に浪そたちける

右

[illegible]

四十五番

左

[illegible]

右

[illegible]

四十六番

左　　源正忠朝臣

[illegible]

右　　藤原光俊朝臣

[illegible]

四十七番

左

行やらて山路くらしつ郭公今一声のきかまほしさに

右

月をみハおもひしりにきなく夏なれと夜をしらるゝ

四十八番

左

萬代を行てもわたる君か代のすゑはるかなる波そ立なる

右

ほしきえ死なぬしんまことにぬれしかは

四十九番

左　　　参議俊親

いまはとてわかれし花の木のもとに山桜心のこりて枝になほさけ

右　　　法橋顕昭

水草のかけにいとゝしく色そへて花をそれと乱れみたれぬ

五十番

左

雲間よりかすみしのゝめのほとときすとはぬにつけてなれぬはなし

右

人しれすなけきこそたえねやまのはの岩根

五十一番

左

[illegible]

右

[illegible]

五十二番

左

[illegible]

[illegible]

右

[illegible]

[illegible]

五十三番

左

[illegible]

右

[illegible]

五十四番

左

[illegible]

右

[illegible]

五十五番

左　　中院侍従

身をしらぬ心はなにゝまよふらむ思ひすてゝもなほ恋しき

右　　新院弁内侍

和歌の浦のしほせにかよふあしたづのこゑもやなきて恋わたるらむ

五十六番

左

世の人やまたしらぬらんなに事もおもへばかなしいくたびもかな

右

まくらはこなたにかよふ人もなし身をしるあめのふるもかなしき

五十七番

左

住よしの神はあはれとおもふらんむなしき舟をさしてきつれば

右

おのれきかむとおもふかひもなし見すてゝかへる人のつらさを

五十八番

左　　小大君

ちるとても香をとめし梅の花いろやことしも人にしらるゝ

右　　大納言隆

春霞たなびく山の桜花うつろはむとや色かはりゆく

五十九番

左

いはしみつ流の身をたえぬ□□□□□□□□

右

うちなかめみし面影のねやにさへ□□□□

六十番

左

あるゝやと花は枝にも世中に月日は□□□□

右

春かはかり世をうきよにも□□□□□□

六十一番

左　　　藤原高光

かくはかりへかたくみゆる世中にうらやましくもすめる月かな

右　　　後成卿女

こととへよ思おきつの浜千鳥なく〳〵出し跡の月かけ

六十二番

左

秋の夜の月風に□□□□□□□□

右

下紅葉□□□□□□□□□□

六十二番

左

[illegible]

右

[illegible]

六十三番

左　　藤原義孝

君かためをしからさりし命さへなかくもかなとおもひけるかな

右　　中納言兼輔

人のおやの心はやみにあらねとも子をおもふ道にまとひぬるかな

六十四番

左

[illegible]

右

[illegible]

六十五番

左

[illegible]

右

[illegible]

六十七番

左　　大納言公任

はるきてそ人もとひける山里は花こそ宿のあるしなりけれ

右　　前内大臣基家

ふかき夜のまつかせさえてねさめする宿まくらにとまる春の夜の月

六十八番

左

あさまたき嵐の山のさむけれは紅葉の錦きぬ人そなき

右

松かけの入海ひろくなりにけりのみなとに吹こす峯の松風

六十九番

左

霜をとる袖にこほれる冬の夜の月の影こそさえまさりけれ

右

草も木も河にかはれる長雨にうき世の袖もしをれそひぬる

七十番

左　　安法法師

夏夜はさこそ上かなる月なれはしはしもあらぬ秋の夜の色

右　　源師光

山の端の月とにほひて花もかすめる春の夜の月

七十一番

左

世をそむく山の南の松風に苔の衣や夜寒なるらん

右

侘人の宿よかくて橘の花もちりぬるけふも[illegible]

七十二番

左

おほよその神の相生をうへて千代まてもみん

右

くもりなき[illegible]ける君か後の世さへもやすかるへき

七十三番

左

清少納言

夜をこめて鳥のそらねははかるとも世に逢坂の関はゆるさし

右

大納言典侍

長き夜のねさめの[illegible]つくつくと思ふ[illegible]

七十四番

左

うちはらふ[illegible]我身[illegible]

右

あり[illegible]涙なりけり

七十五番

左

東とふくかせにてしるしねハひかるゝ山にかすみの中[illegible]し

右

ゆすりしま[illegible]の[illegible]にかゝるをこえて[illegible]

新時代不同歌合下

作者

左

一條院

弁乳母

中納言定頼

上東門院

三條院

大江嘉言

荻家雅成

右

一院

源具親朝臣

藻壁門院少将

式乾門院御匣

守覚法親王

大僧正覚忠

従三位行能

源頼綱朝臣
堀河右大臣 頼宗公
道命法師
伊勢大輔
津守国基
周防内侍
大弐三位
橘俊綱朝臣
小弁
中納言通俊

道因法師
常磐井太政大臣 実氏公
土御門院小宰相 家隆女
右京大夫行家
寂超法師
平政村朝臣
土御門内大臣 通親公
参議教長
源家長朝臣
民部卿為家

康資王母
権大納言公実
瞻西上人
輔仁親王
大納言成通
神祇伯顕仲
上西門院兵衛

後久我太政大臣 通光公
衣笠内大臣家良公
僧正行意
中務卿親王 宗尊
安嘉門院高倉
権中納言長方
大納言為氏

七十六番

左　　　　　　一条院

みさきよの袖ぬらひて夜ぬれと袖ぬれと袖ぬれ

右　　　　　　一院

大空の雲の通ひぢふきとちよしはしとゝめん見え
ぬ面かけ

七十七番

左

秋風の霧を尾花にふきよせて光をそへてやどる月影

右

忘れゐる世ハ残りなく思へとハぬ月かハ恨みかな

七十八番

左

神代まても思ひとつかゝ人ならもわかゆかりなきこゝろそ[illegible]

右

いかにしてこゝろくれなゐしらとゝ云こそをもひしらるれ[illegible]

七十九番

左

はるとやまひはいりけるゆくゑをたつねよの里[illegible]

弁乳母

右

なにはえかすみおはれ也かすみわたれる春の朧月

源具親朝臣

[illegible]

八十番

左

まつさはたにしまふ人てやといくとはふかき[illegible]

右

とれるなかけとおもふなかきこゝろとはなをしらる月

八十一番

左

ふかきとも夜の名なりせはなにはえの[illegible]

右

とはそこ云ひはかへさ波に[illegible]なるらん

八十二番

左　　　　中納言定頼

ぬ朝戸浪の川音もさえてたえまなく寒き夜すがら

右　　　　藻壁門院少将

たえてやはそれとはかねてしらねども恋ひわたるらん

八十三番

左

今よりは又咲花もなきものをいたくなおきそ菊のうへの露

右

とふ人の心はなれて雨季の夜の袖にうきてやなく

八十四番

左

身はすてゝ心をあづまにやりて後はいかにぞあはれ見べきまかりける

右

惜しかれし名のみ見えかはれぬ人なほかなしき

八十五番

左　　　　上東門院

あふことを京にしたひ欲しかねつゝいかにや見ゆる

右

松かぜもかはりて見しよりは後のことをかなしむる

八十六番

左

いふ事も今はたえにしたのみかなこれにそえけるみはかくてはと

右

色にいてる言の葉のみにさためなきうきめにのみそ恋わたるかな

八十七番

左

思ひきややすらふたくひしらすして浦よりそてをぬらす覧

右

すゝきたく思ひのなかにくれ山の杉の村たち行かたもなし

八十八番

左　　三条院

あし引の山のあなたにすむ人はまたてや秋の月をみるらむ

右　　守覚法親王

あらしふく山の峯の高みとてこの葉のなかにしくれ哉

八十九番

左

心にもあらてうき世になからへは恋しかるへき夜半の月哉

右

つれなさに今は思ひもたえなまし思ひしられぬ我身なりせは

九十番

左

いにしへのなきをもとこふるにはわれもふるさとに[illegible]

右

なからへて世をいとひなからもうきをしる身は[illegible]

九十一番

左　　大納言

秋の夜の月の光のさやけきにこよひのやともおもふなりけり

右　　大僧正覚忠

ときはなるまつの葉の[illegible]にもしらぬ[illegible]けり

九十二番

左

思ひやるなかはものゝ[illegible]

右

秋の夜の月のひかりのさやけきに庭のおもてはしもかとそ見る

九十三番

左

なか月の[illegible]てらすかけのあかきにたかきやまのは[illegible]

右

と[illegible]とてすてし山の[illegible]月かけ[illegible]

九十四番

左　　藤原雅成

昨日まで花にかゝりし峯の雪きえてのちこそ春の風吹

右　　従三位行能

うつろはぬ人の心そやすからぬ花のさかりをみるにつけても

九十五番

左

ふりまさる夜半の月影みるよりも人の心そまつ[illegible]

右

なかめつゝあるを思ひに月はみな人の心のうき[illegible]

九十六番

左

風吹は宮居やしめの榊葉にかゝるしらゆふ[illegible]

右

うきたりつるすゑの心にかはりなき世をあかすしも[illegible]

九十七番

左　　源親[illegible]

かくれなき秋の夜すから音にのみ秋のこゝろを[illegible]

右　　同法し

まれにすむ月の宮人きえぬとも[illegible]

九十八番

左

夕日さすあさてきかすへのにまよふや秋のくれかな

右

鴫のゐる入江のなみは岩越てさゝなみよする不絶のうへ

九十九番

左

ちる人のけさはすゝしれわするゝかなしともゆへ

右

山のはにみえぬたのきみかねと春花をなかけきかはせし

百番

左

桜花わかぬ御よをかさすらしいやこまかきにはの道

堀河左大臣家云

右

あさゆけばとほき道ともみえぬかな明ぬさきこそ花のみるかな

花山井太政大臣家云

百一番

左

人よりも先に見えつる月かげを渡るつる月はうれしき道にあへる

右

みなと川秋ゆく水のさへてこそ照る月かげもさえまさりける

百二番

左

あらてとやせん命のかぎりハ是こそ人のなさけなりけれ

右

あはれなるやとハ数ならぬ身のためにこそ

百三番

左　　　道命法し

いさ里のあけぬなけにける鶏の声もやまぬ

右　　　左衛門院小宰相

星わたすなけや五月の郭公の声の

百四番

左

さらぬだにわが身ハはなくてことに

右

ものおもひてみるつる夏の雨の

百五番

左

わすれて流るる月のかげ

右

なかさの

百六番

左　伊勢大輔

[illegible]

右　右京大夫行家

[illegible]

百七番

左

[illegible]

右

[illegible]

百八番

左

[illegible]

右

[illegible]

百九番

左　清原元輔

[illegible]

右　寂蓮法師

[illegible]

百十番

左

あるしなきすみかにゝほふ桜花哀しるらん春や過けん

右

天の原月よりみれは浪よりも心にかゝるもしほやくあま

百十一番

左

暁のわかれ路の小田を行過るあさをきそふる袖の露かな

右

折かくる袖もしほれてぬれぬるもさなからくもる涙なりけり

百十二番

左　　周防内侍

春の夜の夢はかりなる手枕にかひなくたゝむ名こそ惜けれ

右　　平兼盛

こやすみし来し夜かきりの明かたにしほるゝ袖やかわくらん

百十三番

左

年ふりぬるつま木の軒にさしにし花も今は見えけり

右

月とよそに山のはにのみもの思ふとしも見えはせぬ身か

百十四番

左

住侘て秋の山里に秋の夜の月をみるらん人もなき宿

右

なにはえのあしの東也露の涙のさそふ風ふく夜

百十五番

左

たちかへり花そともなく秋の野にちりかふ花の色そわすれぬ

大貳三位

土御門内大臣通親公

暮かけの尾上の梢花ちりて山やまかせにかほる夕暮

百十六番

左

さくら花散けん花の色なれやあらしに匂ふ春の山かせ

右

あひみんとおもふかなしき夕くれのそらのけしきよ

百十七番

左

わりなしや花の木風吹は人しれすこそ春はなけかる

右

朝夕の浮世の秋のあはれをもしらぬ人の道そかなしき

百十八番

左　　　　　橘俊綱朝臣

あすさらみゑそやまのしかの音明ほのの名のみ寺かる

右　　　　　参議教長

わかのうつゝ沖とてこゆる雁かねすみたつ秋の霧の名残信

百十九番

左

名に高き身をのみなかしにうき雲の嵐のまくらになれり

右

うちはへて宿をはしらぬ旅人にさそふ旅の寝覚哉

百廿番

左

都人なれはいさよひまちいてゝ宿は月見の秋そ寝覚

右

こよひ月見はるの雨もなかりねともあはれもやすむなへもとにし

百廿一番

左　　　　　小弁

あきはきもふしみの里の野辺の露に袖はかはきぬ秋のよ

右　　　　　源家長朝臣

河風もまたいつしかになりぬらし秋の木葉も散るなり

百廿番

左

[illegible]

右

[illegible]

百廿二番

左

[illegible]

右

[illegible]

百廿三番

左

[illegible]

中納言通俊

右

[illegible]

民部卿為家

百廿四番

左

[illegible]

右

[illegible]

百廿六番

左

情あるいろえかはりそむしはしをそらなきまでぞおもひて

右

とのへふくかぜにおく露の月ぬれて秋の夜

百廿七番

左

ゆふ月すむ花橘の匂ひかは風のこゝろもしらぬやとしの

康資王母

右

みやこやま風まちかねたる花よりもはやく散ぬる

後久我太政大臣通光公

百廿八番

左

あすのみちもみなかみ遠くながれ来て水の

右

さくらさく山桜の花さかりて春のかぜ

百廿九番

左

柳や春の池の汀になびくらん

右

いくめぐりそらゆく月もかはらぬ

百卅番

左　権大納言公實

秋をわけてく吉野の宮のあれはわか紀もさやさやくるらむ

右　衣笠内大臣家良公

秋かせを袖なかぬ稲葉に露そおかすとまれ長き人

百卅一番

左

ことしたにゆく夕くれの風の音にさそはれ来る月の涼しかれ

右

夕されは露吹とふく秋風に見えすなるまて鹿そなくなる

百卅二番

左

穂薄をみなかきりなき花すゝき井の手に野辺にかゝる

右

うかりける秋のわか宿の雲はれてかゝる月の影にまかせる

百卅三番

左　勝西上人

ちる花の宿の紀にはまたしも秋もなく宿にかゝる

右　信正行意

山風の秋の夜あはれしめぬ秋の露に袖のしほれる

百卅四番

左

いはまこすたきのしら浪月のかけさえてはけしき峯のあらし哉

右

夜もすから風のおとさへをやみなくさえゆくまゝに霜やおくらん

百卅五番

左

浪乃花かけてかはらぬ秋の色も松にこそ見れ世々の久しさ

右

あきとこそ見ゆる紅葉のにしきをもはなのたもとにかさねてそきる

百卅六番

左

惟仁親王

有明の月のかけさへかはるとも花の色香はいつもかはらし

右

中務卿親王 宗尊

かはりゆくやよひの空のはなくもりかすみもふかき山のはの月

百卅七番

左

はなかけをなかめしよりやすゝしさも秋のはしめの夕くれの空

右

やま桜のかけみえてさく月のよはにほふ花のかほりも風にまかせて

百卅八番

左

いつはりに言のはまても守る世に人のこゝろをしらぬはかなき

右

見れはこそ見ぬ夜にもなるゝ月の影も恋しさまさる秋の夜半かな

百卅九番

左

をしむへき秋もおしなへてはるかにこえしこゝろちよ

大納言成通

右

秋のゆふへしつかにまよふゝかき夜の月のかけはさえけり

百四十番

左

人こそ道に言のはをおもひしに秋の夜風そ身にはしみける

右

尽せぬはおほかる中のことのはをいつの世まてかわするへきかな

百四十一番

左

しら雲のたなひく山の嶺こえてたちかへりけむ人を恋しみ

右

こゝろよりはなれて人に心をもとめて袖に涙をかけぬ日そなき

百四十二番

左　　　　　　　　権僧正永縁

きよみかたよるしほかせのあらけれはなみのしらゆふかけてみえけり

右　　　　　　　　道助法親王

白妙の玉にぬきとる秋の野の露のおきける（萩の）花のいろかな

百四十三番

左

いかはかり秋は光のまさるらむ雲のうへなる月のさかりを

右

荻の葉に風のおとせぬ秋もあらは涙のほかに月はみてまし

百四十四番

左

まちいてゝ光そまさる月のかけはなかめてかゝる秋の夜の空

右

そめかゝるやかてとまれる草むらのかけもとまらぬ水の（みなかみ）

百四十五番

左　　　　　　　　神祇伯顕仲

夜もすから庭は浪にて白妙の月の入ぬるかたをしるかな（けるかな）

右　　　　　　　　権中納言長方

何をかは秋にはなさむよもすからやまのあらしの風の音哉

百四十六番

左

青葉より水のおもしろき山川に紀の川つきせぬ流かな

右

もえ出るくさのわかばのなへしにも世の盛つまにある文也

百四十七番

左

物思ふいかならん世のすゑはいかなる心かはらぬ

右

紀の国や越ちの浜のしほ風に波のたちそふうきねかな

百四十八番

左　上西門院兵衛

かぜふきて八重にほふ花とこそみれ音はかはらぬ

右　大納言為氏

しほぢよりみなと吹く風のうら山はゆふぐれにしてみえ

百四十九番

左

なにとなく心にかゝる夕暮はあはれなる音の

右

いつてたりけり心のうちの秋ぞかし中なる露のけしき

百十番

九

[illegible]

右

[illegible]

續歌合部類巻之三十一

二十一番歌合　文明十年八月二日

題　江月　紅葉　秋祝

作者

左方

世房　勝二首　持一首

参議左中将季經　持三首

権大納言季春　勝二首　持一首

権大納言雅行　持一首　負二首

續庫

實隆朝臣 勝一首 負二首

権大納言典侍 持一首 負二首

内大臣 持二首 負一首

右方

従三位基綱 勝一首 持一首 負一首

民部卿忠富 勝二首 持一首

按察使親長 勝一首 持二首

前左近衛大将公數女 勝一首 持二首

元長 勝二首 負一首

権大納言教秀 持二首 負一首

勾當内侍 持一首 負二首

讀師 内大臣

講師 元長

判者 禅閤

一番 江月

左 女房

むとしも光とみえくにの西れ
いり江の波は月やとるなり

右　　　従二位基綱

ぬれにけり袖にむしのねは堀江の水も
秋風しまめくすめる月かな

一　右方申云右歌末の句風とよめり
且歌　右方申云左方のあらし
本のごとよめり云難
左右の哥ともにおのおのよろしく侍る
ん所右方申云風情といひくく
かりしる所侍れどもあれの
まさしくきこえてみえけて他の

かなしくとひてさえて
あるとしるをわりてかくし侍り
たよりある所さもこそやかくし侍ら
ん

二番

左　　　　参議左中将季経
影とまるなこれへ江の堀江のみ
よるもすゝしき月ふくる所

右　　　民部卿忠富
よもすがら浪のみさえわたるさ

さゝこの入江の浪は月をも
古今云都の波もて洗ふ
古詩云秋の波浪舟にかゝて秋
水洗而なし古詩の詞にもいふ
秋浪可為洗撥頭
右方申云たこの浦に打よくみ
まろく以府なるとさゝこの入江
にそなきされさるおかつらし
又思ふ事きたこの入えも洗ふさん
由りて　左方陳云月と詠せんに

何れもともとくりしかれといふしを何
雖平
秋の浪は古詩ともうくまてもあ
ふくるゝすあれらやのまらぬま
ての経もあしとて見え待を
左ろりらきれ詞も此一首に
とりてはおしうす待り月を
そさらて経かうは経に待を
ときろうすての事はわるまし
勝よや何かうまし

三首

九　　権大納言季春

雲風乃こゑうちくゝ空にかよふ

松すみのしの浦の上の月

大　　梅家使親長

うたりうし露もしみをいでは江の江乃

雲は行くまをうて月の形

大中云二句別離也

雨中云うたりうし露もしみをいで

ゆら露をとりつくさらのすゝ也

又雲は行くまをもみのつおふ山うら

浦乃松ふうて西ふう江はの江れ

雲ふとさ角て行くみふる山まち

いつく

雨云移恒の歌とふう二代集乃

作者よわうなとりすゝした

本歌もわうなまうや　大の云も

ほかの歌ふうし但初の句すり

恨ひとえ面うやいうはりられを

わきまへし

四番

左　　権大納言雅縁

夏かれにかゝりし桜ふかくもみゆ
玉江乃あしよ月をこゝろみさ

右　　正敷卿女

中ゝにちらす流えくらして玉の
玉江にみこもれ桜のかれ月

右申云錦有之心之稀聲詞病
難治之　左方申云めてたく
乃詞先達卿か難乾ニ有の

とかは不知またおもはるへし
部詞病ふてとふくいふ如玉とも中
詠ありて幸まよらも聞まさ
ゆひてられさゝも侍るやうに
ての詞も校りくすうてい乃妙なき
よし定家卿もや侍り　れあつく
玉のおもも乃しむる桜木也
玉乃家れ玉不もいりて之て
侍りさのこなるゆりられとられ
もおもはれ又まや　のこさくられ

判云よ侍るへし
六番
左　　　実隆朝臣
妙なるよそりあらしのすむ江のすさきかすさ
哀秋てらしも浪乃花ゝを
右　　　元長
時雨ゆくすゑもなよ雲もなや
ゆくこの分かれに乃浪のよれ月
ちかゝし云あらしのすむ江のすまま
しくひしりてこゝ西紙江の
弁よわし秋雲月雲会　左勝云す
さの江よ哀秋と称すへきこそ候
申云是もふゆくこの細江とゝへ
らもとふら侍るよ秋気ふとて示
てふ秋おりひあまや月の時雨
よあれふもや雨　右勝云　秋家
ともある称し上も強ある右承
左あらのすむ江ゆくそて侍く
おやゝし侍りあらしのすさぬすき
雨の入江かもれいく哀もむせ

くらへ侍りしさうらふや　右歌優
艶と花にすての難に侍るにて見えて
ふる月のさびしく絶えて侍るを
第一句の心の字あまりて聞え
さ夜中なるとあはれに侍る
やまのはとのほりつる月といふと
いつくえこと侍り　此番左の右
風よ優にして共につゝく侍らむ
侍るへし
左勝

左　　権大納言典侍
浪のうへに遠くみえつる島の
雲とらぬ姉のよる月
右　　権大納言経房
難波人入江のあしのかれつゝと
あらはれてみえつる浪のうへの月
左歌云詞云々歌難
右歌云詞云可難之事
すゑの松の事の月あまりて
つきあらはれ草をまさるへし

白菊乃花をおもふにも猶芳と
侍するを通わす
七拾
九　内大臣
清乃音凡よふのよちりに山嵐
打しきぬねる月見にほよ交よもり
太　句當内侍
浪のおみとよりし(に)こ難波江の
蘆よふつりもれる月の影作
古方中に云海ちとに京家古詩之

花ゆしけおもひもなかりや　紀貫之三
句有不足之上新くてけふ秋
よう在　此方中云千載集　後
指約に候ふとおもふて細
て絶て指示会て指ふ事太
方讀中云堀河院百首伝来云
為以桃月モ千年速婦事紀
汐乃詞と月の事ハ照つとせよと
ふりりとて折てまし浪す
を仰せともふらかのみむ

つきさかや鏡の吉山おなし
もおもりみけらもしくやかし
何ぞやはよ為にをよせらすおり
くして落葉よらしとよわる
思ひよみし何り後判為播に
流の百そもまてはてとまりて
おなよとりつきてと為論なり
清れ座と求一句よらぬは論き
何なすこかるこ出もてはつなる
うや月れ新をと慶よらし随りき

ねらとも申おくしきは猶よ何
アもおすゝへて折とすへるや

一番　紅葉

左　　　　権大納言典侍
をりかゝる錦とこそ見れ川面のこ
志れりこ山よりしも紅葉て

右　　　　元長
秋らの紅葉も乱るのさくつて山
しをのりみちれるやうらし
右中云志つりさ山の紅葉わく

しかるに此陳云曲面のことき
つかさ山のほとりにすみかねまて
そ給ふねりや
此申云書も燈も文字ハ四十す
又おとしふてもなくてたまつるて
といふてをおよりわ家によらんか
らりして給ふは程なしるかなう
にしや　太陳中云も文字ハ校り
いすまて名絶るひねかしと
白氏書の胴まてかる乃ことく

火のんころちるへさりや　ときん
志ほ桂山のりみちわつらふしう
らぬ罪をいりこと云面縁因え
ほせのりみち家いく友額せる
とも罪るへしさらわや絶み
面のこれ洞しりんほとく給
きえ紀家よまらるとよむま
とれたとひおとて燈ともいれ
あくもりみちれるへおるとふ
てこも子細あるましきなや杜

乃きわりたる中くりみちのゝ
とまつてくりや行らん
二条
右　　女房
けふいたくゆきそれをてりかし
いりはかきりと海のしほみち
太　　白菊内侍
ふくからのよそわりみらをと
母のとはなふおもりひきむ
古今中云古今集我恋ハ沙気

もちろんそてのかしとひまう
をおもひてかきらしとやす
それ云云猶雅作者二句深しのゝ
此の詞いさゝかおもひしりてや
それ云山めくりする母のれいをも
のこそてりかしと行る不絵わる
ふよ御らう　太それしれゝ去の
詞海よれの雅よ藤行さへしまう
家宗ならぬ母よおもしろき
こゝに行なへしもの海なわり

まてりみちれぬ乃まかせくさこ
ともいつ　九條ちえし
三首
九　　　　閑太臣
本乃こて紀州有注出て所収の
まつむ花乃ころまなりね也
太　　　　従二位基俊
れんらんのん乃花いりみちこの
帰りそめ出すゐまうつりそて
古方中云本乃葉こ紀れ文字

こしらうす文書梅落葉ふめ秋
行云会記　九陳云紀葉本乃州云に
書梅よ花萄よそ云下文部題
九方中云心の花梅よまれん事
なりおれさんいおかうくおとも
とし出うふや太陳云人の
花りくし心のことい名るなるとし
本の紫うちゝね州も中行るとし
られうしうえりしにて文心の花
梅るきいとていふましきかも

ほとゝきすへつゝす婦らのむへよと
北くいひすゝしも枕の時と
きゝやつゝへりすゝしも前
の新いはふまことは猶まことゆら
くゆり

四番

左　　　　　　　　　　實隆朝臣

あるよとく家ゝふとわか出わく
りがたりもらふ梅のにほひて

右　　　　　　　　　　梅宗依親女

此なよひ是西れ山いはけのにほひよ
時雨とうけてゐ家しわらん
左は三風ふかゝらしくこえて
うらしい家はよ花家の色も
こと深き参津玄け方紅葉の始
終とよわり落葉よ限へるも
在はあ時雨とゆもて枯わるまま
まあ梅の家ま和らんも千代
好は時よらり事よ頂勝す
可為よや

凡才写句のきりなの句すらうか
ゐのましかゝすたんなれ思ふ
の山の時句とうきて記録する
んみなる雅れ例しぬうやまおう
んきうあさりなるの句は時よよ
つるて雅ふさうり例えん
たいら所うまさおうや例ん
ぬ句
れ
参議中将雅経
いそうふうらも所てまし時句へ

帰とりうすむ山の面絵　心
大
云数卿女
沉田姫うしも思折りれ記り
とうやあしこのみのみとふあて
大宮中云山代あしこゝて記録
とおく以て俳御連帰記但記歌会
そ屋陪枚よ一村と云ふを記録そ
しうなりすと雅すとここ但清
ふおかて枝出記
凡やし云古字所しる雅うへさし

よろしかるへし
両端乃跡の文老眼にかゝし京おや
めもわかれて侍れとも左右両様
ときこえぬる細ハ時分よりは
しもの句や又すこしまさり侍ふ
あへるやいさゝかまさりてやまし
侍り左の歌はかはりめてめ侍
ともおもひて侍るや又漁陽
の跡とそしら手の葉にとり
てはかゝしからね風情なる侍

のこるかすかなれとこ色も初ほとに
侍へし
六番
左　参議右中将雅経
しられぬくも松につゆえる紅葉のくれよ
ましろ紅葉や染らさるらん
右　民部卿忠富
さらくも山すそ時雨乃紅時く
りみちのかし衣の紅をてりけふ
おほかた左雑紀左ほかた此風

情からしらぬ人もなく志
られの紅をきよく色あさきる
相よこさる也
右の方よ松のつゆかさにとも
みちとめしりかかすかまめ
はしらぬにや　右のかと
まれてし御よ色あせ志てる恨
よ御まことにかふれ来のかそ
田龍をふくみかゆかれいつも
御また　右いさしかまむ御まさるかや

御らん

七番

左　　　　　　　権大納言季春

宮のまへのもみちの色さえても
ふかくみゆる秋のさかりそ

右　　　　　　　権大納言教秀

宮のはるも深みすしや左田姫
時雨といそくもみちなるらん

右中将宗別子細
左方中将好宗授誹説田姫

いまその住乃姿風よ成句をとい
ふくん乃秋られといふ事に方寸に
句とこそ承りけれどもや
右方申ハ句いましからく侍也
そこしける難かるべし
右記田郎乃しられをいはぬくかり
の様政乃方乃面影まさに侍り
もうり志かりく　右持ニ申あるべし

一番　秋祝

左　　　　内大臣

左乃代々ならぬ代世々乃梅は例の
おもてあらくめくみと見こそく

右　　　　　　公数口女

末梅し花せぬこそ花乃あと
左のみる設よろしくて侍ける
右方申云右文字しるく侍り云々
弁　左方申云詞皆なくみゆ侍り
しるす右方左文古今真
名序乃こころや関乃まへ作者
乃人は外の事のことおほくとよ

まれ侍らんと頼言よとり
てらいらと思し侍りをたあく
みうえしと侍らハ一首の勝とも
つましや侍らん左右ましかる
難らし可侍きことや申すへきお
そ

二番

左　　　　権大納言典侍

あひおもふ人かよひハせす侍れ
いくかりともかへさ申れし

右　　　　元長

めくりあはむ頼もあらは我君の
御代も侍りなく此程ろすへ
君か千とせの難も侍へし一ふし
のよろしきは申しも侍しを
左ハ云めくりあハんとあり志
らもとこら出るまとらせ
さすりくね様もいくよりやさ
しも

左右乃歌共ニ齢のかり月の代

なかはみいくめぐりぬへくりわ
いひてこの詞はさもありぬべけれ
猶まことそ侍るよしうへ　右の
初句漢句にことやうに侍り
左は漢もたてしとらぬ心ゆるや
いかにも猶侍らんかし

三番

左　　権大納言家春
早きころ霞井乃こくや初春も
立けさ霞かかれる山かな

右　　白高内侍
秋さえてよそにひとのくれや
こゑのしたねなかれ出らん
左方申云早をとかんはまするを
右は漢語なれは申侍るを　和歌にも
名よみならはされたるや　但右云
さしおりてされたる　左陳云ハし
いむゆゑより菊よたとへ侍るを
あるからよ長称の作例あるを
よくかなや

れいに云非難此歌二句にとこそ
きこゆるや
古哥をとらんにはよすか深難ハ心
ゆるしく似たり菊とかはりよせさうら
むよしそうてこれ難は似たら
め古歌三句にわたるとす似たり出ら
ん句半わたるとしきこゆるやう
これらを判と似たらは持てのた
ほえらとこちらし似たるへきや
たてころ難なし同しとみゆる寄

ぬの菊にまさしく似たり持たる
へし

四番

左　　　　　　実隆朝臣
四方の海波の田のもにこえて今
年ある秋と告しらるらし

右　　　　　　従二位基綱
我宿のわさみれ花をわきて出ん
みるにそまことやうきもむ

左方申云秋穂と不儀泰云子細

左方よりしきりに申けり
右陳状のきハ沙汰侍らねハ侍ん
浅らまるねとも侍らねハ不
審細のんおりつらて侍り諍ハ
下句れる年たさらてに侍ると
好年もおもさハ甚しとも
侍る歌の詞よ下陳の趣とも
おしてハ云々とて先ゝ侍を
左の右んの云乃んいふう
らむとありけれやいかさ

下陳のうきくなりぬるて左を
猶くるしくや

六番

左　権大納言雅経

まそ毎世ぬれらみれ霧れたゝくしよ
云らよひもも有乃ゝ空

右　民部大富

いく秋と契りをこめて草ふかみ
かりみれつ袖乃露そうくらん

左中云詞云判旨　花さしてや台

うし
雨肖の恵みあつきあさくよろこ
びかく一段の光風かゝりけると
御くれ給ひけれは たちまちに
玉てん給りて家の名をそふ
家は家々くゆかしやくしわか
三句草葉も葉をも待らむ花草
葉もとよるより後まつへるや
六句
花　世房

とのゝえんゑらしこそやなきの
梅をとしちつひきりむかへて
哉　　梅大納言教秀
とし家は民の草葉も打なびき
めぐみあまねき御代の梅花
大方中云有盛記
あまた中とし家は名の字名
なよろこべとは外記
これとのゝえん梅し可友則か方と
おもつり　大納言の字よ名字よ

此字にこゝろの諸芳を念すへし古今

御うたはやゝ御らん

七首

凡　参議左中将雅康

百敷乃みぎりよゝにつたへくる道乃た

千ち路も言の神やまもれなし

太　按察使親長

言の葉のたねよゝにしげくの

乃ちのよゝのひや万代乃梅

太中云秘蜜中伝言并云緑氣

右中云存古新紀撰之可誦之事

右大臣ヨ秘密中乃祝詞之諸芳之事

さそ高秘の哉言を兼ねへし

別にも松とやゝ御らんし

110X
646
8
17